

王觀堂靜安先生校注本「長春真人 西遊記」譯注（續き）

杉山 二郎

王觀堂靜安先生校注、長春真人西遊記、譯注

吾が大学院大學紀要五号に一部を收載したが、今回もその続きを以て紙面を塞ぐこととする。額令七十五星霜を閲して致仕することとなり、このため紀要をわたくしの退官記念号として編集されるに至った。本来ならばこゝうした訳稿でなくて研究論攷の体裁を以って紀要を飾るべきであらうが、同じく故平川彰先生の追悼号も刊行せられるので、そこに拙稿を慫慂せられて居り、同時に二篇の論攷文を執筆するには怠墮疎慢であつて應じ難った故に、訳注稿を当てることにしたのである。この訳注稿は繁雜の手間を要し、今日の出版事情に鑑見ても到底陽の目を見ることは覺束ない。そしてこゝうした閑文字に興味関心をもつ読者も期し難いので、当大學紀要の片隅に收載するの他にない仕儀となつたことを弁疏して置きたい。若し將來その続稿の剗削に附すことあらんを念じつつ。

〔本文〕 時得七束、爲禦寒衣。其毛類中國柳花、鮮潔細軟、可爲線、爲繩、爲帛、爲絛、農者亦決渠灌田、土人惟以瓶取水、載而歸。及見中原汲器、喜曰、桃花石諸事皆巧、桃花石謂漢人也。

〔口訳〕 この種羊毛をもつて織り成したものを時に七束ほどを得ると寒さを防ぐ衣を造ることができる。その毛

の類は中国産の柳花に類似していて、鮮潔細軟の性質を持っていて、線條、繩紐、帛布、綿布にも作ることができる程であった。この地の農業の様子を見ると、渠溝を設けて田畑に灌漑し、土地の住民たちは瓶に水を汲み頭に掛けて帰る風俗をみせている。見渡したところ、中原で謂う汲器に当り、住民は喜んで桃花石と云っているが、諸事皆桃花石に巧みに細工できる人を漢人を謂っているのである。

〔王観堂先生注に曰く〕「洪鈞元史譯文證補」の、西域傳注によると、西域の人びとは契丹を呼んで唐喀氏と云っている、と。乃ち遼史で云っている大賀氏の転訛である。此処に云っている桃花石もまた唐喀氏の転訛である。唐喀氏の一語彙を勘案してみるのに、漢北・西域の人びとが中國人と呼んでいる通稱なのであってすでに闕特勤の碑文にある突厥文中にもみられ、東西諸国の学者の注釋でも諸説が紛々として決して決し難い。最近、日本の東洋学者、桑原隲藏博士の如きは、漢語の唐家子の音釋でもって説明している。

〔郎案、此処に桑原隲藏博士、「支那人を指すタウガス又はタムガジといふ稱呼に就いて」を注記すべし。即ち、「吾が輩は之に対して新に唐家子タウガス(タムガジ)説を主張したい。即ちタウガス又はタムガジを唐家子の音釋として、もと唐時代の支那人を指した稱呼と認めるのである。左にその主張の理由を略述いたそう。〕

(一) 支那歴史中、唐の國威は尤も廣く四方に張った。北宋末の朱彧の「萍洲可談」卷一に、

漢威令行於西北、故西北呼中國爲漢。唐威令行於東南、故蠻夷呼中國爲唐。崇寧間(A.D. 一一〇二) 一一〇六) 臣僚上言、邊俗指中國爲漢唐、形於文書。乞並改爲宋……詔從之。

とあるに據ると、唐の滅亡後も、その國號は久しく諸外國人の間に喧傳されたことがわかる。たゞ「萍洲可談」の文面では、唐の國威は東南方面に盛にして、西北方面に振はざりし如く解せらるゝも、之は勿論間違で、唐の國威は一層西北方面に發展して居った。唐の天子は支那の皇帝であると同時に、支那歴史に先例のない、塞外諸族、西域諸國共同の大君主として、天可汗といふ稱号を有した一事實に據っても、容易にこの

間の消息を了解することが出来る。高宗玄宗時代の西域經營の事蹟は、事々しく紹介するに及ぶまい。此の如き國勢強大なる唐の國名が、諸外國民の間に喧傳され、遂に支那の代表的國號となったことは極めて自然と申さねばならぬ。(中略)

南宋初期の江少虞の「皇朝類苑」卷七十七に「倦遊録」を引いて

太宗洎明皇橋中天竺王、取龜茲爲鎮、以至城郭諸國、皆列爲郡縣、至廣州胡人呼中國爲唐家、華言爲唐言。

と明記してある。この「倦遊録」とは南宋の晁公武の「郡齋讀書志」卷十三に收めてある「倦遊雜録」のことで、元豊初(A.D.一〇七八?)張師正の撰する所といふ。されば唐家といふ稱呼は支那の代表的國號として、唐北宋時代を通じて、廣く諸外國人間に使用された事實は極めて明瞭で、毫末の疑惑を容れぬ。曩に引用した「萍洲可談」に據ると、北宋末の崇寧以後、支那政府は諸外國に交渉して、中國を唐(又は唐家)と稱するを廢して、宋と稱せしめたとあるが、この支那政府の計畫は實際に於いて効果なかつたものと見え、南宋元明にかけて、諸外國人は依然支那を指して唐と稱した。その例證は繁くして一々例擧するに堪えぬ。之を要するに唐宋時代にかけて、諸外國人が支那を指して唐家と稱したといふ事實は、確かに唐家人、Tanghai. (Tangas) 説の無上の強みと思ふ。

(三) 古來支那人は自他ともに好んで子といふ稱呼を用ひる。例えば福建人を福建子、江南人を江南子と呼び、漢の皇家の管下にある支那人を漢家子とも、又は略して漢子ともいふ。この漢家子、又は漢子といふ稱呼は、漢時代は勿論、漢の滅亡後も漢といふ國号と同様、依然内外に慣用された。西晋の石崇の王明(昭)君辭に、我本漢家子、將適單于庭(文選、卷廿七)といひ、北齊の文宣帝高洋が、その太子の殷の性質文弱にして、支那人の如きを嘲りて、太子得漢家(子)性質、不似我(北齊書、

卷五)と云ひ、又同帝が支那人の魏愷を罵って、何物漢子(「北齊書」卷廿三)といへるなど皆その例證に供することが出来る。

同様の事情によって唐時代の支那人は自ら唐家人、又は唐子と稱し、當時の諸外國人もこの稱呼を慣用したこと想像に難くない。不幸にして吾が輩は、未だ唐家人といふ稱呼が、當時の内外人に使用された文献上の證據を発見し得ぬけれど、既に支那に対して唐家の稱呼を慣用する彼等諸外國人は、同様に支那人に對して唐家人の稱呼を使用すべきは、自明の道理として承認すべきであらう。唐の滅亡後も、唐家人といふ稱呼は唐家と同様に、依然諸外國人間に慣用されたことは、殆んど疑ひを要れぬと思ふ。

- (四) 唐家人の古音は tang-kia-tsi と Tamghaj 又は Tabgat とよく一致する。蒙古時代の外國人は或は揚州 Yang-dju を Janzai 又は Jamsai と稱した。又唐時代の諸外國人は、國都の長安を Khundan とも Khubdan とも稱した。揚 Yang が Jaum (Yam) に轉ずると同様に、唐 Tang が Tam に轉じ得べく、Khun が Khub に轉ずると同様に Tam が Tab と轉じ得る筈である。家 Kia が Ka 又は ga の音を代表するは普通のことにて、現に南宋の趙汝适の、「諸蕃志」には、瓜哇島の北岸にある Pekalongan の音譯に蒲家龍の三字を當てて居る。(中略) 以上論ぜし所を綜合すると、唐家人 Tang-kia-tsi の音は、最もよく Tamghaj 又は Tabgat と一致するといふに帰着する。〔「東洋文明史論叢」(昭和九年九日、弘文堂書房刊) 四八五—四八九頁。〕

最近の江少虞の「皇朝類苑」卷七十七に引く所の「倦遊錄」に云う「今に至るまで廣州の胡人は中国を唐家と呼んでいるが、華言を唐言と云っているようなものである。

〔本文〕師自金山至此、以詩紀其行云、金山東畔陰山西、千巖萬壑攢深溪、溪邊亂石當道臥、古今不許通輪蹄、

前年軍興二太子^{三太子修金山、二太子修陰山}、修道架橋徹溪水、今年吾道欲西行、車馬喧闐復經此、銀山鐵壁千萬重、爭頭競角誇清雄、日出下觀滄海近、月明上與天河通、參天松如筆管直、森森動有百餘尺、萬株相倚鬱蒼蒼、一鳥不鳴空寂寂、羊腸孟門壓太行、比斯大略猶尋常、雙車上下苦頓擲、百騎前後多驚惶、天池海在山頭上、百里鏡空含萬象、懸車束馬西下山、四十八橋低萬丈、河南海北山無窮、千變萬化規模同、未若茲山太奇絕、磊落峭拔如神功、我來時當八九月、半山已上純爲雪、山前草木暖如春、山後衣衾冷如鐵。

〔口訳〕長春師は金山から此處に至る迄の間の叙感慨を詩に託して、紀行の様子を表現して次の様に云つてゐる即ち

金山東畔陰山西 金山山脈の東の麓で陰山山脈西に当る

千巖萬壑攢深溪 千にもものぼる重った岩や深い谷が沢山あってしかもあつまつてみえる

溪邊亂石當道臥 その溪谷のほとりは石があちらこちらに散在して、丁度道に臥している様に見える

古今不許通輪蹄 昔から今まで、車や馬を通行を許さない程けわしい

前年軍興二太子 先年戦を二太子が興した時に、注に、三人の太子が金山の道を修し、二人の太子は陰山山脈の道を修理したという

修道架橋徹溪水 道路を修理し、橋も架け渡し、溪谷の水を渡ったという

今年吾道欲西行 今年になって吾々はこの道を辿って西に向つて行くについて

車馬喧闐復經此 今まで通れなかった道を今では車馬も通れるようになって喧騒な状況で此の道を経て行く

銀山鐵壁千萬重 銀色に輝く山や、鉄壁のように切り立った崖が、千万にも重なり連なつて

爭頭競角誇清雄 山頂の高さを、また崖の角を競い合い、この清澄雄偉な様子を誇っているかの様で

日出下觀滄海近 日の出で明るくなったので下を見ると、滄い海原が近いように眺められ

月明上與天河通

また月明りで上を仰ぐと、天の河が近くに通じているように見える

參天松如筆管直

天に向って伸び繁っている松は、ちょうど筆管のように真直ぐに見做される

森森動有百餘尺

その松が森を形づくって百余尺にも及んでいるかのよう

萬株相倚鬱蒼蒼

松樹がたくさん相倚って繁っている様子が鬱蒼としている

一鳥不鳴空寂寂

それに対して空には一羽の飛ぶ鳥もなく寂々としづまり返っている

羊腸孟門壓太行

〔郎案：「諸橋漢和」に曰く、孟門、隘道の名。太行山の東、晉の杜祐は孟門は晉の隘道といふ。今の河南省輝県の白徑。太行山の第三徑「左氏・襄三十二」齊侯遂伐晉、取朝歌爲

二隊、入孟門、登太行。〔注〕孟門、晉隘道也。〕

羊腸の道は孟門の隘道に似て、その様子は太行山の孟門を凌ぐ程だ

比斯大略猶尋常

だからこの西域の道に比較してみると孟門の隘道の方が尋常普通である

雙車上下苦頓擲

二輪の車輛は上下して、にわか斜傾するのに苦しみ

百騎前後多驚惶

その前後に扈從する百騎の馬も、多く難路に驚き惶れている

天池海在山頭上

天池とよばれる湖沼海がその山頂にあつて

百里鏡空含萬象

その天池海の面は鏡のように平らで周囲の景色の全ての現象を映している

縣車束馬西下山

滑り易い車を引張り、馬が転がらぬように手綱を束ねて西の方山を下りる

四十八橋低萬丈

その間に四十八もの橋が梁っていて萬丈もの下に降りていたれる

河南海北山無窮

河を南に見ても、天池海を北に目指しても山が重疊として窮まりない

千變萬化規模同

その景色は千變万化するけれども、その規模布曲は同じであつて

未若茲山太奇絶

こうした山の景色程、ひどく奇異で他に類例のないのも珍しい

磊落峭拔如神功

この景色の磊落な落着いた様子といひ奇抜な姿は神の造化のよう

我來時當八九月

わたくしが此の地にやつて來た季節は丁度八・九月頃に當るが

半山已上純爲雪

山の半分以上は純白に輝いた雪山の様子だった

山前草木暖如春

山の麓の前に茂っている草木も暖かそうで春を思わせる

山後衣衾冷如鐵

それでいて北傾面の山の後は、覆っている雪景色で鉄のように冷たく見える

〔王觀堂先生の注に曰く〕「湛然居士文集」の卷二に「陰山を過ぎるのに當つて他人の詩の韻に和す」とあるなかに、

陰山千里橫東西

陰山山脈が千里に涉つて東西に長く横臥わり

秋聲浩浩鳴秋溪

秋の季節の氣配があまねく広く滿ち渡つて秋の谷間を覆っている

猿獠鴻鵠不敢過

〔郎案〕「諸橋漢和」に曰く、「獠、手ながざるの一種、狨〔爾雅、釋獸、疏〕獠、一名猿、

善攀授樹枝〔廣韻〕猿猴也〔詩、小雅、角弓〕母教獠、升木〔傳〕獠、猿屬〔疏〕獠、猿

之輩屬、非猿也瑤璣疏曰、獠、獼猴也、楚人謂之抹猴也。老者爲獠、長臂者爲猿、猿之白

腰者爲獼胡、獼胡猿捷於獼猴、然則獠猿、其類大同。〕

猿や手なが猿の類も大小の渡り鳥たちもこの地を敢えて過渡しない程

天兵百萬馳霜蹄

〔諸橋漢和に曰く〕「霜蹄、駿馬の蹄、又駿馬を云ふ、駿足、良駿、逸駿〔趙嘏。送金狐郎

中赴郢州詩〕霜蹄晁駐秦雲斷、野旆晴翻郢樹秋〔憑獎翁、金馬門賦〕敲銅聲於駿骨。撼削

鐵於霜蹄〔杜甫、韋諷録事宅觀曹將軍書馬圖引〕霜蹄蹴踏長楸間、馬官嘶養森成列〕

百万にも及ぶ朝廷の軍勢が駿馬を馳走させて

萬頃松風落松子

〔諸橋漢和に曰く〕「萬頃、地面や水面などの極めて廣いのを云ふ、頃は面積の單位、一頃

は百骸で我が一町七段余に当る〔管子・揆度〕百乘爲耕田萬頃」
広い地域にわたって松風が吹き渡り松の実を吹き落している
その松林の鬱蒼とした景色が流水に反映して

鬱鬱蒼蒼映流水
六丁何事誇神威
天台羅浮移到此
六丁にわたっての地域は造化の神がその威力を發揮している
〔諸橋漢和〕に曰く「羅浮、山名、湖南省攸県の東、「讀史方輿紀要」に、湖廣長沙府攸

県司空山 羅浮山縣東四十里、與鳳嶺連麓、下有石竇出泉、(※)廣東省增城縣の東博羅縣
の界に跨り、東晋の葛洪が仙術を得た所と傳へる。南漢の劉鋹は嘗て天葦宮を山中に建て
た。山麓は梅の名所として古來名高い。太平御覽、地」とある。

天台山や羅浮山といった幽邃の山を此処に移したかと思われる程
雲霞掩映山重重
雲や霞が山を掩って映え重疊とした光景を現出する

峰巒突兀何雄雄
昔から今まで、こうした天険の地形が西域への往来を阻んできた
古來天險阻西域
人間的生活も營めないような所で中国の中心地と通じている

人烟不興中原通
その通路は細く複雑に迂回して、斜めになったり直進したりする
細道縈紆斜復直

山角摩天不盈尺
山頂の角が天を摩する程聳えて尺にもみたない程に続いている
溪風肅肅溪水寒
溪谷を渡る風は肅々として溪流の水も寒く見える

花落空山人影寂
その山の花も吹き落ちて空しく、人の影も寂として見えない
四十八橋橫雁行
その溪谷に架けられた四十八の橋は雁が横に渡って行くよう

勝游奇觀眞非常
こうした奇観の地を訪問巡回すると、本当に常ならぬ感じがして

臨高俯視千萬仞 高い所を仰ぎ見、溪谷を俯瞰して見ると、千万丈に切り立ち

令人凜凜生恐惶 こうした光景をみた人をして寒々しい気持ちにさせ、恐れを生じさせる

百里鏡湖山頂上 百里にも及ぶ静まり返った鏡のような湖水が山頂の上にあつて

旦暮雲烟浮氣象 朝な夕なに雲烟が立ち上り氣象を変化浮動させる

山南山北多幽絶 山の南も北も幽邃絶佳な眺めに恵まれている

幾派飛泉練千丈 こうした光景のなかに幾つかに分れて流れる泉水が千丈の絹を織るようだ

大河西注波無窮 それを集めた大河は西方に流れてその波はきわまる所がない

千溪萬壑皆會同 千の溪川も万にもものぼる谷溝が皆一緒に集っている

君成綺語壯奇誕 このような景色を人に伝えようと綺羅の語を用いて壮奇の印象を産むが

造物縮手神無功 それに比較するとさすがの造物主も手が縮んで神技も功がない程だが

山高四更才吐月 〔諸橋漢和〕「四更、夜間を五更に分けたその第四、即ち午前二時、丁夜、(伏知道、從軍

五更轉詩) 四更星漢低、落月與雲齋(杜甫日詩) 四更山吐月、殘夜水明樓」
山が高く聳えて立ち夜明けの午前二時にそこから月が昇る

八月山峰半埋雪 八月になつてもこれらの山脈の峰頂には雪が降り半ばを埋め

遙思山外屯邊兵 こうした厳しい風土から遙かに塞外辺疆に屯する兵隊たちを思うと

西風冷徹征衣鉄 激しく吹く西風に曝されて征衣も鉄のように冷たく感じられるだろう

この詩を見れば、又、前韻の詩一首を再び用いて、それに更に、前韻唱玄一首を用いるのみならず前韻が王君玉の西征を送る詩韻二首と、前韻の事に感じての詩二首を、並びに此の長春師の詩韻に利用していることがわかる。これらの詩は皆西域に親しく身を置いた時の作である。

〔本文〕 連日所供勝前、又西行四日、至荅刺速沒鞏河也。

〔口訳〕 連日此処に滞在して供せられた食事は以前より勝っていた。それから西の方向に行くこと四日にして荅刺速沒鞏に到達した。これは沒鞏河の畔りである。

〔王觀堂先生の注記に曰く〕 徐星伯はこの荅刺速沒鞏河を今の伊犁河と云っている。一方程春廬は荅刺速沒鞏と荅刺斯と音が近いと云っている。然れば阿里馬を距ること僅か四日の旅程とすれば、徐星伯氏の謂う伊犁河のとどとするのはこれに概当するに近い。若し程春廬の謂う荅刺斯河と仮定すると、ちょっと遠過ぎる。吹河の西にこの地があるとすると、未だ必ずしも四日の行程で能く到達しないだろうと思われる。今わたくしが勘案してみるのは、徐星伯氏の説と程春廬氏の説はこのようになってゐる。「西遊録」のなかにも「阿里馬城の西に大河がありその名は亦列」と云っている。唐書の西域傳には伊列河を作っている。

〔ブレットシュナイダー氏訳注〕

此処から次の駅通は阿里馬城である。(注. 172) この阿里馬はペルシア中期の著作家が云う処の Almalik である。注. 19 と比較参照のこと。幾人かの東洋学者はこの最近作られた中国地図に記載されてゐる Al-ma-tu 即ち今日の Verny で Issikul イッシククル湖の北にある町と古代の Almalik と同一と見做してゐる。この古代の Almalik はイリ河の溪谷中に位置してゐる現在の Kuldja から程遠くない場所とするに疑いを挿み得ない。Semenoff セメノフ氏のリッター氏の「アジア」第二卷九六頁、注記のロシア語訳文なかで、アルマリクはイリ河の溪谷中に位置してゐて、Kuldja の北西約四〇ヴァーツに建設された町と云っている。故 Zakharoff ザクハロフ「彼は昨年没してゐたが」氏はセメノフ氏が此の地を訪問した時にクルジャでロシアの公使であつたが、わたくしに、彼がセメノフ氏の上記の推定を論じ合つたと語ってくれてゐる。と云うのは、彼セメノフ氏が Sundum から七ヴァースツ(約七・七哩)の距離の処に、古代都市の大きな遺跡が

あることを風聞から知っていたのである)。その阿里馬城は九月廿七日(吾々の曆では十月十四日に当る)に到達したのだった。鋪速滿国の王〔注173この国はカルピニの旅行記に出る Bisermini 恐らくは Mussulman と云う言葉から切り取って造ったものと全く同じであるように思われる。スラヴ民族によって用いられたこうした命名に関する d'Arvezac の行き届いた注記を参照のこと。(カルピニ、七四九、七五〇—を参照) 古代のロシア年代記のなかに Bussurman は度々言及されていて、それが常に回教徒であることを意味している〕はその町からやってきて、長春師に逢うため蒙古人塔刺忽只が〔注174 蒙古語の darugachi が中国漢字で現わされたもの。Rashid-eddin によると、蒙古政府の役人たちは daruga と呼ばれその名前は亦モゴル支配時代の古代のベルシア貨幣の上にも刻印されるのが見出される(ドーソン iii、410—) 供にやって来た。吾々はこの町の西にある果樹園に滞留した。此の地の住民たちはこの果樹園に生る果実を阿里馬と喚び做している。そしてこの地がこの果実故に有名であったので都市も阿里馬の名前で知られている。〔注175、この Alma 阿里馬はトルコ語起源で「林檎」を意味して居り、また注20を参照のこと。Dr. Regal ンゲル博士によると、その場所近くに恐らくは Almalik があったのだらうと思われ(注172を比較参照のこと。) 依然としてその産物である林檎、梨が有名であった〕そこには亦禿鹿麻と呼ばれる一種の布が産出する〔注176 Tolma は依然として東トルキスタン地方の産物素材の名前である。Trotter トロッター大尉の一八七四年に行ったコータン紀行の報告文一五五頁を参照のこと。〕この地の住民たちは、この禿鹿麻は植物繊維の木綿から織り成されると云っている。吾々は冬着として禿鹿麻七着を得た。この毛は中国の楊柳(種を含んだ) 蓄に似ており、非常に清雅で美しく、また軟らかい。それだからこれを用いて糸、縄、衣服を製するため利用される。〔注177、此処に木綿という文字が言及されているが、この木綿は当時において中国において僅かしか知られていなかったらしい。これについては注69を参照のこと。〕野を耕作してゆくのに住民たち

は水道の設備により、人工灌漑を行っている。水を搬ぶために人びとは瓶を用い、それを頭にのせて運ぶ。彼らが水を汲むために中国で用いられている汲器を見ると、非常に喜んで、そして次の様に云う。即ち、「桃花石は貴方、非常によく出来た人」だと、彼らは中国人を指して桃花石と呼んでいるのである。〔注178. Palladius. パラディウスはこの桃花石 Tao-hua-shi が古代においてマホメット教徒によって中国を指すのに用いられた Tangai といった言葉に由来しているのだろうと推定している。これに就いてはユール大佐のこの語彙についての卓抜した解釈を参照のこと、Yule "Cathay" lin. d. Obsson. i. 203 〕〔郎案、この問題について桑原隲藏博士、「支那人を指すタウガス又はタムガジといふ稱呼に就いて」〔東洋文明史論叢〕所收、四七一〜四九五頁の論文に詳しい。以下その要点を摘記する。

シナといふ國號より後れ、カタイといふ稱呼より前に、西曆七世紀より十四世紀にかけて約八百年の間、北塞西域の諸国民は、支那人(又は支那)に對してタウガス又はタムガジといふ稱呼を使用した。

タウガス Tangas といふ名稱は、初めて西曆七世紀の初期の東羅馬の Theophylactus Simocatta の歴史に見えてゐる。Theophylactus のタウガスに關する記事は、可なり混雜を極め、且つ從來の學者は未だ十分にこの記事を解釋して居らぬ様に思ふ。(中略) たゞ Theophylactus の一節に

「タウガスの領土は河によって兩分されて居る。この河は過去に於て交戦中の二大國の境界線をなした。この二大國は〔その國人〕の着衣の色彩によって彼此區別される。即ちその一つは黒衣を着け、他の一つは赤衣を着く。吾々の時代となりて、丁度マウリス Maurice 皇帝が東羅馬に君臨せらるゝ時代に、黒衣の國はこの河を越えて赤衣の國を攻め、遂に之を滅ぼして、その手に〔タウガスの〕領土を統一した。(Yule and Cordier: Cathay, vol. I. P. 30, Coedes: Textes d'auteurs grecs et latins, P. 140) 云々。』つゞけに Klapproth の注意せるが如く、支那に於ける南北朝対立の事實を傳へたもので、境界線の河とは揚子江のことで、マウ

リスの時代 (A.D. 五八二—六〇二) に、即ち西暦五八九年に北朝の隋が揚子江を越へ、南朝の陳を攻め滅ぼして、天下を統一したことを述べたものに相違ない (Klaproth: Sur les differens noms de la "Chine" (Mémoires de Tome III) P.263) (中略)

西暦十一世紀の前半の Al-Biruni から、十四世紀當初の Aboulfeda に至るまで、アラブ人の地理書には、支那人に対して Tamghaj, Tomghaj, Toughaj 等の稱呼を屢に使用して居る (Sprenger: Die Rost- und Reiserouten des Orients, s.90.; Yule and cordier: Cathay, vl.I. P.33.) 唐時代の西暦八世紀の半頃の突厥碑文には、支那人を Tapqač (Tabqač) といふ (Thomsen: Inscriptions de l'Orkhon, PP.26, 139) 北宋時代の西暦十一世紀の半頃の回鶻語辭典には、支那人を Tapqač といふ (Radloff: Kudatku Bilik, Bd. II. s. 18), 更に蒙古時代に西暦十三世紀の西域人が支那人を指して桃花石といふ (元の邱處機の「西遊記」卷上「郎案。今此処に注記せる個処なり」。此等の稱呼はすべて上記のタウガスと関係があつて、同一の語源に由来するものと、學界一般に認められて居る。

タウガス又はタムガジ等の稱呼が、支那人 (時には支那) を指すことは明白であるけれど、何が故に支那人をタスガスと呼ぶ歟、將たタウガスとは元來何を意味するかの解釋に關して、諸學者の説は一定して居らぬ。今日まで發表され、學者の諸説を紹介すると、略左の如くである。

- (一) De Guignes は、タウガスを、西暦五世紀から六世紀の初半にかけて北支那を占領した、大魏 || 拓跋魏) Tagöei の音譯と解釋する (Yule and Cordier: Cathay, vol.I.P.32)
- (二) Richthofen はタウガスをアラブ地理學者の所謂 Tagazgaz に關係ありと認めらるゝ。(Richthofen: China, Bd.I.s.565)
- (三) Hirth 氏はタウガスを唐家 Tang-ka の音訳と解釋する (Hirth: Nachworte zur Inschrift des

Tonjukuk, s.35)

(四) 我が白鳥博士はタウガスを拓跋族 [Tak-bat] の音譯と認めた(白鳥博士、「東胡民族考」明治四十四年十一月「史学雜誌」一六〇一七頁) 白鳥博士に後ること正に一年にして Pelliot 氏は白鳥博士と全然同一なる拓跋 Tak-bat=Tabrac 説を發表した。(pelliot: L'Origine du nom de Chine "P.732.) やれど、此等の諸説は何れも妥當と認め難い。(中略)

此の如く過去に發表された諸學説には、何れも若干の短處弱點を免れぬ。吾が輩は之に對して新に唐家子、タウガス(タムガジ)説を主張したい。即ちタウガス又はタムガジを唐家子の音譯として、もと唐時代の支那人を指した稱呼と認めるのである。左にその主張の理由を略述いたそう。

(一) 支那歷代中、唐の國威は尤も廣く四方に張った。北宋末の朱彧の「萍洲可談」卷一に、漢威令行於西北、故西北呼中國爲漢。唐威令行於東南、故蠻夷呼中國爲唐。崇寧間(西曆一一〇二—一一〇六) 臣僚上言、邊俗指中國爲漢唐、形於文書、迄並改爲宋。……詔從之。

とあるに據ると、唐の滅亡後もその國號は久しく諸外國人の間に喧傳されたことがわかる。たゞ「萍洲可談」の文面では、唐の國威は東南方面に盛んにして、西北方面に振はざりし如く解せらるゝも、之は勿論間違いで、唐の國威は一層西北方面に發展して居った。唐の天子は支那の皇帝であると同時に、支那歷代に先例のない、塞外諸族、西域諸國共同の大君主として、天可汗といふ稱呼を有した一事實に據っても、容易にこの間の消息を了解することが出来る。(中略)

(二) 記録上の證據に照しても、新舊「唐書」の東夷傳、西域(西戎)傳、北狄傳等を檢閲すれば明白なるが如く、新羅人、靺鞨人、突厥人、回鶻人、高昌人等は、何れも支那を唐家と稱して居る。元來、唐家とは唐の皇室を意味すべきであるが、更に敷衍して唐の皇室を戴ける支那をも唐家と稱した。その

尤も明確なる實例二三を挙げると、(中略)之要するに唐宋時代にかけて、諸外國人が支那を指して唐家と稱した事實は、確に唐家人 *Tanghaj* (*Taugas*) 説の無上の強みと思ふ。

- (三) 古来、支那人は自他ともに好んで子といふ稱號を用ひる。例へば福建人を福建子、江南人を江南子と呼び、漢の皇家の管下にある支那人を漢家子とも、又は略して漢子ともいふ。この漢家子又は漢子といふ稱呼は、漢時代は勿論、漢滅亡後も漢といふ國號と同様、依然内外に慣用された。(中略) 同様の事情によって、唐時代の支那人は自ら唐家人又は唐子と稱し、當時の諸外國人もこの稱呼を慣用したことを想像に難くない。不幸にして吾が輩は、未だ唐家人といふ稱呼が、當時の内外人に使用された文献上の證據を發見し得ぬけれど、既に支那に對して唐家の稱呼を慣用する彼等諸外國人は、同様に支那人に對して唐家人の稱呼を使用すべきは、自明の道理として承認すべきであらう。唐の滅亡後も唐家人といふ稱呼は唐家と同様に、依然諸外國人間に慣用されたことは、殆ど疑ひを要れぬと思ふ。

- (四) 唐家人の古音は、*Tang-kiä-tsi* と *Tanghaj* 又は *Tabgat* とよく一致する。蒙古時代の外國人は或は揚州 *Yang-dju* を *Iamzai* 又は *Jamsai* と稱した。又唐時代の諸外國人は、國都の長安を *Khundan* と *Khubdan* と稱した。(Ivar Hallberg: *L'Extreme Orient dans la littérature etc.* P.273) 揚が *Yang* が *Iam* (*Yam*) に轉ずると同様に、唐 *Tang* が *Tam* に轉じ得べく *Khun* が *Khub* に轉ずると同様に *Tam* が *Tab* と轉じ得る筈である。(中略) 要するに唐家人 *Taugas* (*Tanghaj*) 説は、從來の大魏「*Taugas* 説」、唐家「*Taugas* 説」、拓跋「*Taugas* 説等」に比して、音韻上尤も無難なる事實は、誰人と雖も承認せなければならぬ。(以下略)

〔郎案、此処に、*Yule and Cordier; Cathay, vol.I. Preliminary Essay* P.32へを訳述する。「幾人かの学説を通覽するにトルキスタンの諸侯と、この奇妙な條り」(*Teophylactus*) の「*Taugas* とぞ一致させているが、

併し、その稱呼が中国人を指していることを疑うべき理由はないのである。だが、このテオフィラクトスによってタウガスが Sinae, Seres に同定するのでもないのだが、或る充分な情報を持った男がテオフィラストスに語っているところのものが、触れている国が何処に在るのかをも全く自らわからないで喋った通りを繰り返すに過なかつたことが明らかになっている。De Guignes ドギユヌ氏はこの條りが中国に關聯していることを示した。ギボンもこの説を容認し、またクラプロートは全く同じ意味で敷衍したのだった。明らかに自らが先んじていたことなど無意識だった。そして未だこのタウガスの名前が中国人に、ないしは彼らの首都を指していることを説明もしなかつたのだった。

ド・ギユヌ氏は「*Ag. ge. v.* 大魏、魏王朝と一致するのだと説明していた。(注²、Pelliot ベリオ「通報」一九一二年十月、七三二頁にド・ギユヌ説を容れ、「三八五年から五五六年まで、北部中国は東部蒙古から侵入してきた夷戎の王朝により占領せられた。その名は中国風では魏である。その首都は長い間、山西省であり、当時は河南に移っていた。併し中国の歴史家たちはこれらの侵略者の名を拓跋と音訳していたのである。」との説である。Tabrac が拓跋から由来しているのは有りそうなことである) 北魏は隋に先立つ王朝で、タムガジといった名前をはっきり表現していることは疑いはあるまい。かつて漠然と中国に、アジアの西方の国々によって極東の眞只中にある大きな国に宛てられ、さらに古代アラビア人ペルシア人著作家によってもタウガスと呼ばれている。こうして一二一八年の頃、マホメット教徒でホレズムの主長マホメッドがボハラに於いて成吉思汗の使者を歓迎したのだったが、マホメッドは自分の領土の原住民の一人をこれら使者の一人のため夜迄送って、成吉思汗がタムガジ「*Tangháj*」を實際に征服したことが本当かどうかを問わしめたといふ。(注¹、ドーンソン「蒙古史」の一卷二〇三頁、この著者はテオフィラクトスの所謂タウガスについて注記のなかで扱っている。そして亦アルビルニーが中国の *Yangju* の町を名付けて、*Tangháj, Khán,*

という稱号をもった Faghfur の居城と云つてゐる (Sprenner's Post und Reise-Route des Orients, P.90) Aboulfeda アブルフェータは「Qanuu」——わたくしが思うにアルブルーニーの著作——から引用して、全く同じことを云つてゐる。即ち Tīnghāj Khān と呼ばれた中国の Faghfur、彼は同時に大汗であり Al-Niswy の歴史によると、そのなかで Khwarizm Shah とタルタル人に触れている記事で、中国に於けるタルタル人の王様の名前が Tooghaj である云つてゐる。このことは Badger 氏によってわたくしのためにアブルフェータの写本記録から親切にも翻訳してくれたものから云つたのである。「コルディエ氏の注記 1 ↓ Qānoum を読んでみると Yandjōū は中国の Faghfūr の主都である。それは Tanghādī-Khan の名前を反映している。そのタムガジ汗は彼らの偉大な王なのであるので、Nasawi の年代記を読むと、タルタル人とホレズムの王の歴史がそれでわかるのだが、中国におけるタルタル人の王様の首都は Tooghadj と云つた名前をつけてゐる。」Aboulfeda, II.2.2 partie, P.123. —Guyard の訳による)。わたくしはこの最後の言葉 Tooghadj がアラビア語でどのように書かれていたか知らないし、またテオフィラクトスの所謂 Tangas と密接に関連相連していることが殆ど全く偶然のことによつてゐるようにも思われる。Aboulfeda によつて引用された Niswy or Nessawi と云う言葉が Khwarizm の Sultan Jalaluddin に云つた秘書であつたし、また疑いなくゾーソンからの本文のなかに語られている逸話に一致してゐるのである。

Masudi は、中国の王様が居住してゐた折、Tangama Jabān と云う語が用ゐられてゐて [Bagbour ではなかつた (qn. Thamgaj. ca) Prairies d'Or. 「黄金の牧場 i.306] と云つてゐる。Clavijo クラヴィホに次の様に云う「Zagatays 人たちは中国の皇帝を、Tangus と呼んでいて、欲深い豚皇帝を意味している」と云つてゐる。〔cf. 郎案：クラヴィホ著、山田信夫訳、チモール帝国紀行（昭和四十二年四月、桃源社刊）二〇〇頁〕 Markham PP.133〜4 を参照のこと。〔コルディエ注「チャカタイ汗国の王は Tangus と仇名されてゐ、そ

れは侮辱的なもので豚皇帝と云っているようなもの」…… (P.152. Vida del gran Tamó lan por Ruy Gonzalez de Clavijo, Madrid,1782) 「クラヴィホのルイ・ゴンザレスによる大タモランの生涯」世界史のなかで (恐らくは Sharifuddin に従って) 一三九八年に、^{カフ}中国皇帝 Tangaj Khan からチムールの所に使節たちがやって来たことが述べられている (「コルディエ注」 「イリの地において、道権子と呼ばれる中国人がみいだされているが、パラディウスは、中国にいるマホメット教徒たちによって、古代に宛てられた tangaj と云う言葉に従って云い表わされたものと想像している」と。 Brnetschneider: Med.Researches, i:P.71 参照)

以下の例は更らに疑わしい。「吾々はこの地域を中国と呼んでいる。それに対して彼らは自らの言語で Tame、その住民を Tangis と名付けているが、吾々は彼らをシナ人と名付けている」 (Alhacen: his Arabike Historie of Tamerlane in Purchas,iii,152)

Tangtash, Tangnash, Taknas と云った語彙が Sadik Isfahani と Shajrat ul Atrak と云った翻訳のなかで繰り返えし姿をみせて、Machin すなわちその地の大都市と同義語として表わされている。併しながら、これらの言葉は恐らく Nangias という流布した読み方に相應して、蒙古人たちによって南中国を指す名前であったらしい。(ドーン、 「蒙古史」 第一巻、一九〇一頁を参照。また Quat; Rashideddin, P.1xxxvi) このタウガス、タムガジの名は殆んど唐時代に何の關係もない筈である。というのは唐朝はテオフィラクトスの晩年迄、王朝を保っていたからである。そして、テオフィラクトスはタウガス Taugas が皇帝 Maurice の時代にトルコ人の可汗と閔聯付けられて言及している言葉である。併し乍ら、その Thangaj と云う稱呼は西紀一〇四三〜四四年にかけてのトルコ王の貨幣上に記されているのが発見されている (Fraehn の Meyendorff: Voyages d'Orenboung à Bokhara, P.314:seqq. の注記のなかを参照のこと、また

D'Herbelot in v. Thamgay をも参照のこと。) 地理学者 Bakui は亦 Thamgay をトルコ国の大都市ときめており、その町の近くに二つの山脈にはさまれて多くの村落が散在していて、そこには唯狭い溪谷によって近付けるのみである。と (Not et Extr. ii. 491)

〔郎案・憑承鈞原著、陸峻嶺增訂『西域地名』、Lei. 今の伊犁河、「前漢書」陳湯傳曰、伊列水、「新唐書」曰、伊麗河、亦名づけて帝牽河と云う。長春邱處機「西遊記」には亦列河と云っている。危素の「耶律希亮神通碑」にも亦烈河と云っている。〕

(ブレッドシッナイダー氏の訳注) さらに西方に行くと、吾々は四日にして答刺速 没鞏に到達した。(注、179 Talas 河のこと、没鞏に対しては muren 〓蒙古語で河を指してこの言葉の意味しているようである。この長春師の「西遊記」のなかにもいくつかの混乱がある。旅行者たちが Almalik 阿里馬から Talas 河 (注23 を参照のこと) 迄の距離を計ることが出来るのは全く不可能である。四日間で殆んど六百英哩の踏破することからしても、Lerd レルチ氏は、答刺速没鞏は、タラス河ではなくて、Chu チュー河を意味しているであろうと考察している。〔郎案・憑承鈞原著陸峻嶺增訂「西域地名」に Chu、「隋書」「新唐書」に碎葉川に作っている。「新唐書」、石國傳に又、細葉川に作っている。玄奘の「西域記」には素葉水に作っている。また「新唐書西突厥傳」に葉水に作り、長春師「西遊記」に吹没鞏 (Chu maran) に作っている。没鞏という字は蒙古語で河の意味となっている。「元朝秘史」には垂河に作っているが、今のソ聯中央アジアの楚河 (Chu R.) に当たると云う。〕 Schuyler ("Turkestan", i. 397) シクユイレール氏は、その西遊記の日記をつけた人はイリ河を意味していたと思われるが、併しペンが滑ってそれをタラス河と呼んだという意見を持っている。わたくしとしては単にその旅行期間中に記入した注記を案配している内に、この旅行者がその旅行記の或る部分を無意識のうちに転置してしまったと考えられるのだけでも。このことは、彼がタラ

ス河を後にして Karakhitai (本文のなかにさらに後に見えているのだが) このカラキタイの国を注記している事実から確められる一方、耶律楚材〔注22を参照〕西遊はペルシア人作家たちの謂うカラキタイである。このカラキタイの帝国は契丹、即ち遼朝の王子により開創され、彼は北支那から臣下たちの一団とともに逃亡したのであり、A.D. 一一二五年に金による契丹が倒れた時に当っている。中国人によって耶律大石と呼ばれたこの酋長は、東西両トルキスタンを征服して Khwarezm をすべ併呑した。Rashid-eddin ラシッド・エッディンはカラキタイの首都は Belasagun (恐らくは蒙古語の balgasun. という「町」を意味する言葉と全く同じだろうが) であると述べている。中国の著作家たちはそれを Hu-sz. -wo-lu-do と呼んでいる。この名前の最後の三文字は亦 wo-r-ds と書かれて ordo すなわち「汗の居所」を指していた。満州語の Hosun は「力」を意味している。恐らくこの中国語の hn-sz. は契丹語のなかにあって似たような意味があったと思われる、知られているように、契丹人は満州人と同じツングース系族に属していたと考えられる。「元朝秘史」によれば、カラキタイの首府は Ch'u. 河、吾はの地図で云うところの Chu 河の畔りにあったと云っている。カラキタイについての更に詳細なことは、第二部を参照のこと。この帝国は一一〇八年に Naimans ナイマン人の最後の汗の子 Guchuk により打ち倒された。この Guchuk は一一一八年に蒙古人により殺害された。こうしてカラキタイの帝国は耶律楚材がこの地を通過した時には存在していなかった。一方、この耶律楚材が常徳(次の章の旅行記「西使記」を参照のこと。)と同じように、タラス河(乃至、その町)に到着する前にカラキタイについて言及しているのである。さらに亦、中央アジアを西から東に踏破した Rudruk リュブルクはすでに触れた二人の中国人旅行家と相呼応して、最初にタラス市に注目しており、次いで以前にカラキタイが住んでいた国に到着したのだった。カラキタイの汗の住所がチュエ河のほとり(マタラス河の東)に位置していたことが知られており、チュエ河について長春の帰還旅行の際に言及がなされ

てもいる。この河とAlmalikの間に与えられている距離は、真実に近いようだ。こうしてみると、何故、長春真人の日記作製者がタラス河からSairamまで略一六英哩ある旅行に一ヶ月を要したかを理解するのは容易であろうし、亦一方ではAlmalikからタラス河まで六百哩あるのだが、ほんの四日間であつたと思つては、たゞ考へてゐるのである。

〔本文〕水勢深闊、抵西北流從東來、載斷陰山、河南復是雪山。十月二日乗舟以濟、南下至一山、山北有一小城。又西行五日、宣使以師奉詔來、去行在漸邇、先往馳奏。獨鎮海公、從師西行七日、度西南一山、逢東夏使、回禮師於帳前。

〔口訳〕この河の水の勢いは深く活発であつて、西北から流れて東から来て陰山山脈を横斷し、再び河は南に流れて雪山の麓に引き返している。十月二日に舟に乗つて河を渡り、南に降りると一つの大きな山がある。その山の北側に一つの小さな城塞がある。又西に向かつて行くこと五日で宣使（劉仲録）が長春師を詔勅に従つて俱奉し来り、その仮りの宮殿に近付いたので、漸くこの先を馳せ往き鎮海公に長春師の來訪をまず奏言し、長春師一行に従つて西に向かうこと二日許り、西南に横たわる一山を越えた。すると東夏国の使者に逢い、師を宿宮天幕の帳の前で回礼したのだつた。

〔王觀堂先生の注記に曰く〕此処に云う東夏使者は、屠敬山が思うところでは、即ち金國の使者の烏古孫仲端としている。この仲端の回程をもつて考勘してみると、歲月については固より合致するのであるが、記載中前に金と稱して、河南の地方を此の金に当ててゐる。この東夏と稱するためには殆んどその当時の情況に近くない。こうしたことから当然ながら蒲鮮萬奴の使者とするのがよいだろう。「元史」太祖紀十年冬十月の條に、金の宣撫蒲鮮萬奴が遼東地方に據つて天王と僭かに号し、国号を大真といつて改元した天泰とある。太祖十一年冬十月にこの蒲鮮萬奴は降伏してその子の帳哥を人質にして入内させたといふ。ところがまた叛乱を企て僭稱して東夏

といったとある。注記に「聖武親征録」に僭称して東夏王と云ったと作っている。是うしたことから元の太宗癸巳の年(A.D.一二三三年)に萬奴を擒虜にした由であるが〔cf.郎案…百衲本「元史」卷二、本紀一、太宗五年癸巳、九月擒萬奴とある〕紀傳には皆、萬奴の事象は見えない。然るに鄭麟趾の「高麗史」、高宗世家五年戊寅、注によれば元の太祖の十三年に當る十二月巳亥、朔、蒙古元帥哈真と札刺が兵一萬を率ゐて東真萬奴の派遣した完顔子淵の兵二萬と供に、丹賊を討伐しようと声明した。和猛順徳の四城を攻撃して撃破した。直ちに江東城を目指し、是れに嗣いで撃破した。己卯庚辰辛巳の三年間に、蒙古の使者は高麗に到着して、すなわち東真使と一緒にした。〔郎案…「高麗史」(明治四十一年十一月、國書刊行會刊)卷二十二。高宗己卯六年、八月壬辰、東北面兵島使報云「蒙古與東真國造兵來屯鎮溟城外」九月辛旦、蒙古使十一人東真國九人來」とあり、辛巳八年、八月巳未、「蒙古使著古興等十三人、東真八人并婦女一人來」九月癸巳「蒙古使這可等二十三人併婦女一人來」十月巳卯「蒙古使喜速不花等七人來」十二月壬辰「蒙古使三人、東真十七人來」更に壬午九年八月癸巳「蒙古使三十一人來」などの記事が見え、王靜安先生の言を裏書きしている。〕是のことは庚辛年間のことで萬奴は方に蒙古と共同して契丹を討伐したのだった。それだから使者が西域にやって来たのに合致するわけだ。蓋し、萬奴は自ら叛立して東夏(眞)と號していたとしても、やはり尚、蒙古に帰属しつかえて、未だこれまで叛乱したことがないのだという。甲申の年にいたり、東真是牒を高麗に通じて修好し、始めて蒙古とすでに旧好を絶った由の言葉が見えていて、〔郎案…「高麗史」卷二十二、甲申十一年正月丙午「蒙古使札古也等十人來」正月戊申「東真國遣使責版二道來其一曰、蒙古成吉思師老絶滅不知所存、訛赤忻貪暴不仁、已絶舊好」とある〕然かもそれ程経たない内にまた蒙古に降伏したことになる。耶律文正の「湛然居士文集」卷四によると、「博霄之韻を用いて水陸の疏文に代えるの詩に云う。

東夏再降烽火滅 東夏が再び降伏したので、急を告げる烽火も消え

西門一戰塞烟沈 西門で漢の高祖が一度戦うと城塞の炊煙も絶えてしまったように

顯觀頌朔施仁政 仰ぎ見てその天子の政令が仁政を施しているのを頌め讃え

佇侍更元布德音 改元して汎ねき徳の恵みを浴するのを更に待ち望んでいる。」

此の詩は未だ、元の大祖が即位していない時に作ったものであるが、東夏国が元に叛いたり服属したりしたこと
の一度でないことを知っているのがわかる。

〔本文〕 因問来自何時、使者曰、自七月十二日辭朝、帝將兵追算端汗至印度

〔口訳〕 よって何時から此処にやって来ていたのかを、此等の東夏の使者に問うたところが、使者の答えて云う
ことに、七月十二日からで、大汗皇帝に拜謁を辞してから、陛下は兵を率いて算端汗を追撃して、印度に迄到達
して居りますと云った。

〔王観堂先生の注記に曰く〕 元朝、「聖武親征録」によると、壬午歳（一二二二年）の夏に、答里寒塞高原に避暑
していた折に丁度、西域の速里壇札蘭丁が遁げ去るといった事件が惹いた。そこで遂に哲別（諸橋漢和に曰く）
哲別、元、別速特の人、開國四先鋒の一人、成吉思汗に従って乃蠻部、西夏、金等を征し、西遼の故地を収め、
次いで花刺子摸の遠征に従軍し、サマルカンドを陥れ、南ロシアに入り欽察部を征して東帰の途上で歿した
〔元史〕、「新元史」、二百五十四）彼を前鋒として之を追撃させた。再び速不台（諸橋漢和に曰く）速不台、元
蒙古兀良舎の人、謚は忠良、太祖に仕ふ、金を討って功あり、兀魯思、馬札兒等の部を討つ、戦功謀略並ぶもの
なし。〔元史〕に亦雪不台の傳あり、その記載同じであるから同一人を両出したのであらう（元史、一百二十一、
一百二十二。）と拔都を遣わしてその継嗣とした。また脱忽察兒殿を派遣したりした。その後、哲別は蔑里可汗
城に到達したのだが、この城を陥落させないで通過した。速不台、拔都もまた同じ様であった。脱忽察兒は到着
してその外征軍と一緒に戦ったので、蔑里可汗は大いに畏懼して城を捨てて逃走した。忽都と忽那顔はこのこと

を聞いて、兵を率いて進軍し襲撃した。時に蔑里可汗は札蘭丁と会合して戦闘に赴いたのだが、我が軍に不利であったので、遂に使を遣わして大汗にその由を申し上げた。塔里寒寨より精銳の軍隊を親しく自から率いてこの聯合軍を迎え討った。そして追撃して辛目連河に及び、そこで蔑里可汗を捕虜としてその軍勢を屠るにいたった。その時札蘭丁は脱逃して辛目連河に身を投げて遊泳して捕まえられなかった。そのため遂に八剌那顔の將兵を派遣して急に追撃したのだけれども、捕獲することができなかった。そのた忻都の人民の大半を捕虜として帰還してきた、といった記事がある。これらの記述を考察してみると、このような事件のあったのは、実際には辛巳の年(A.D.一二二一年)のことであった。ただ「親征録」や「元史」などの記載をみる限り、壬午の年(A.D.一二二年)としているのであるが、いづれも誤記しているのであって、詳細は、わたくしの「親征録校注」を参照のこと。

王観堂先生、全集第十二冊「聖武親征録校注」の記事を左に抄記する。

「壬午の年の春、又、徒思、匿察兀兒などの城を占領した。(注、従思城は「元史」に途思に作る)(中略) 威吉思汗はまさに塔里寒寨を攻撃して、人々に面接して、並びに兵はこの城寨を占領した。(中略) 是の年の夏、塔里寒寨の高原に避暑された。時に西域速里壇札蘭丁(秘史によると札刺勒丁莎勒壇に作っている)が遁げ去った。遂に哲別に命じて先鋒隊として此れを追撃させた。再び速不台、拔都を派遣してその追撃継続者とした。さらに又脱忽察兒殿を派遣したのだった。その後哲別は蔑里可汗城に到着した。(この蔑里可汗城のことは「秘史」に罕篋力克に作っている)ところが攻略侵犯できずに経過してしまった。速不台、拔都も亦それと同じであった。脱忽察兒が蔑里可汗城に到着して、その外征軍と一緒に共同して戦ったので、蔑里可汗は大いに畏懼して、城寨を棄てて逃亡した。忽都、忽那顔はこの報せを聞いて兵を率いて進軍來襲してきたので、蔑里可汗は札蘭丁と合流して戦闘を交えたのだった。ところが我が軍に勝利の益がなく負け

そうなので、遂に使を遣わして大汗に上申奏聞するところがあった。そこで、塔里寒業より大汗は精銳を率いて親しく之を擊破した上、辛目連河に追及したのだった。(注記、「説郛」本は辛目連河に作っているが、汪、何の二本を参照すると、辛目速河に作られている。今、某氏の改校訂正した「秘史」によるのに、申沐連河に作り、今の印度河に当る)、將兵は河に追いつめて、そこで蔑里可汗を捕獲し、その軍衆を殺戮した。併し札蘭丁は逃がれて、河に身を投じ泳いで逃げ去っていた。遂に八刺那顔を派遣して追求した。(注記、「秘史」には巴刺に作る) 將兵は札蘭丁を急追してみたが捕獲することができなかった。そこで忻都人民の大半を捕虜にして帰還したのであって、(中略)(注記、此らの親征録の記事を勘案してみると、庚辰(A.D.一二二〇年)より甲申の年(A.D.一二二四年)に到る間の西域征討の記事は全部、事実あった年の一年後のことであつたらしい。拉施特ラシドの書や元史の太祖紀など並びに同じ誤りを犯して、此の「親征録」の原本もすでに此の様に一年ずれているのである。近年の柯劭忞氏の「新元史」やドーソンの「蒙兀児史」は、記述に際して、改正を行っているけれども、然し改正の理由を挙げて備えてはいないのである。今、略これを挙げて論じてみよう。「元史」太祖紀十四年己卯の年に訛荅利城を取った。そして十五年庚辰春三月、太祖帝は蒲華城を降し取り、五月には尋思干城をも攻め克ち取った、とある。此処で「親征録」の外に別の書物の記載を参照採択して、「親征録」が記載しているところによって、幹脱羅、ト哈兒、薛迷思干の城を占領した三事を取って考えてみると、則ち、各々は一年後のことであることがわかる。これが第一の理由である。耶律楚材傳の己卯年夏(A.D.一二一九年)六月、帝は親しく回回國を征伐して駐留したのであった。也兒的石河のことは此の「親征録」によると庚辰の年(A.D.一二二〇年)に關聯しているのが、第二の理由である。湛然居士文集上卷に西征のことは庚午年(A.D.一二二〇年)元歴表には庚辰の年に帝の聖駕は尋思汗城に駐留したとある。又「再び西域山城駅を過ぐるの詩が序」に云う。「庚辰の年の冬、駅を馳せて西域の山城駅を過ぐ」

とあるが此の山城駅を考えてみると、尋思干城と蒲華城の間に存在することがわかる。しかして、此の「親征録」に記載した蒲華城と尋思干城に克って占領したことも、辛巳の年(A.D.一二二一年)のことであるとするのが理由の第三である。「雪樓先生文集」の河東郡公伯德那神道碑に次のように云っている。公の諱は伯德那、西域の班勒紇の人である、國初の歳は庚辰(A.D.一二二〇年)、大いに兵をもよおして西征して班勒紇を平定した。「元史」の察罕傳に亦次のように云う。察罕は西域の板勒紇人で、父は伯德那だ、と。庚辰の年、元兵が西域に下ったので、一族をあげて投降来歸したと。こうして、此の「親征録」に云う班勒紇城を破ったという事実も亦、辛巳年であるとするのが理由の四である。長春師の「西遊記」に記している、辛巳年七月に太祖帝が將に算端汗王を追撃して印度に迄到ったとする記事は、此の「親征録」に札蘭丁を破ったのが辛目連河においてであり、壬辰の年としているのも、理由の五である。又、「西遊記」太祖の班師のことが壬午之年の秋といっているが、しかも「親征録」では癸未の年としているのも理由の六である。これら六つの証拠によって、自から庚辰より申申の年にいたる五年間の事実は當に各事象を一年繰り上げ移行しなくてはならないことが知られよう。

〔本文〕 明日遭大雪、至回紇小城、雪盈尺、日出即消、十有六日西南過板橋渡河。晚至南山下、即大石林牙大石峯
大、石林牙小。

〔口訳〕 その明くる日大雪に遭って、ウイグル人の住む小城に到達した。降雪は一尺以上に積った。ところが日が出るとすぐに消えて了ったのである。その月十六日西南方向に行進して板橋を過ぎ、河を渡った。晩になって南山の山麓に到達した。それは大石林牙という所であるという。

〔王觀堂先生の注記に曰く〕 今、「遼史」を勘案してみるのに、天祚紀に、「耶律大石、世に名づけて西遼大石となす」とある。その字は重德、太祖八代の孫であるという。翰林学士に拔擢され、次いで承旨を奉ずる役目となっ

た。遼は学士を林牙と云っている。」〔郎案…「百衲本「遼史」第三十、本紀第三十、天祚皇帝四、保大五年（A.D.一一二五年）「耶律大石者、世號篤西遼大石、字重德、太祖八代孫也、通遼漢字、善騎射、登天慶五年（A.D.一一一五年）進士第、擢翰林應奉、尋陞承旨、遼以翰林爲林牙、故構大石林牙、歷泰祥二州刺史、遼興軍節度使」とあるのに該当する。〕故に大石林牙と称する命名の大石林牙は人の名前をもって表わしており、その都城の名前となったのであろう。後に又簡略化して大石とも称し、例えば、「大石の東を過ぐること二十程」などと云ったり、又、「西のかた大石を経過し、半年程、その地に居住した」と云うなどの例がある。この大石という地は今の吹河の南で、阿歴山大嶺の北をへだたり、西遼の都城のある所と考えられる。今録する所で、後に西遼建都の地である。だから、「遼史」天祚紀に虎思斡耳朶に作っているし〔郎案…百衲本、「遼史」卷三十、本紀第三十、天祚皇帝四、保大五年〕文武百官冊立大石、爲帝以甲辰歲（保大四年）二月五日即位、年三十八。號篤兒罕復上漢、尊號曰天祐皇帝、改元延慶（中略）延慶三年、班師東歸、馬行二十日、得善地建都城、號虎思斡耳朶、改延慶爲康國元年」に都城の名を虎思斡耳朶と號した由を云っている。〕、「金史」の忠義伝、粘割韓奴傳に、骨斯訛魯朶に作っているのが〔郎案…百衲本、「金史」卷百二十一、列傳第五十九、忠義一、粘割韓奴傳「皇統四年（A.D.一一四四年）回紇遣使入貢言、大石與其國租鄰、大石已死、詔遣韓奴與其使俱往、因觀其國風俗、加武義將軍奉使大石韓奴、去復不聞。問天定中（A.D.一一六一—一一八九年）回紇移習覽三人至、西南招討司貿易、自言、本國回紇鄒括番部、所居城名骨斯訛魯朶、俗無兵器、以田爲業、所獲十分之一輸官。」とある。〕それに当る。元史の曷斯麥里傳に、谷則斡兒朶に作り〔郎案…百衲本、「元史」一百二十、列傳卷第七、曷思麥里傳「曷思麥里、西域谷則斡兒朶人、初爲西遼闊兒罕近侍、後爲谷則斡兒朶所屬可散八思哈長官、太祖西征、曷思麥里率可散等城、酋長迎降、大將哲伯以聞帝」とある。〕、郭寶玉傳に古徐兒國訛夷朶に作っている〔郎案…百衲本、「元史」百四十九、列傳卷第三十六郭寶玉傳「甲戌（A.D.一二一四年）從帝討契丹遺族、歷古徐鬼國、訛夷朶等城破其兵三十餘萬、寶

玉胸中流矢、帝命剖牛腹置其中、少頃乃蘇、尋復戰、牧別失八里、別失蘭等城」とある古徐鬼(兒)、訛夷朶等の城がそれである。」「元遣山大丞相劉氏先鑿神道碑」には古續兒國訛夷朶に作つてもいる。劉郁撰の「常德西使記」には亦堵に作つており「郎案・欽定四庫全書版、「西使記」、「二月二十四日過亦堵、兩山間土平、民夥溝洫映帶、多故壘、壞垣間、之蓋契丹之故居也。計其地去和林萬五千里、而近有河、曰亦運、流洶洶東注、土人曰、此黃河也。」の亦堵。」この亦堵は訛夷朶の略である。長春真人「西遊記」には是れを大石林牙と謂い、略称して大石としているが、又、人名の大石林牙をもって国都の名と称している。例えば大石の東を過ぎること二十程といった云い方をする例だの、西の方大石を過ぎ半年是の地に居るといった例がそれである。この大石林牙の地は今日の吹河の南、阿歴山大嶺の北に在ると云う。

而して拉施特哀丁ラシツテアイトンの蒙古史のなかでは、この地を八喇沙袞と謂っている。元史の地理志を案ずるのに、この西北地附録の処に、八里茫とある一地に当っている。「經世大典圖」にまた此の地圖に阿力麻里の西南に在りと謂っている、柯耳魯即ち葛邏祿に当る。亦刺八里アハルの南、倭赤、今の鳥什に当る。「郎案、憑承鈞の「西域地名」に“Och.〈西域圖志〉に鄂什に作り、〈西域水道記〉に鳥什に作っている。疑問に思うのだが、元史、西北地附録」の倭赤は今の新疆省烏恰縣台であろうか」とあり。その西北にあるとも謂っている。」武進屠氏は八里茫は乃ち八里沙の誤りではないだろうかと謂っている。即ちラシツド氏の蒙古史の書中にある八喇沙袞が當にそれに概当するのだろう。案ずるに武進屠氏の説も亦是である。わたくしが推量するのに虎思斡耳朶は契丹の新しい名前であつて、その名は東方で行われていたもので、この八喇沙袞は突厥の旧い名前を云つていたのである。「前に東西二土に行く」という、八喇沙袞は即ち「唐書地理志」にある裴羅將軍城の対音であろうと思われる。「資治通鑑考異」卷二を攻究すると、唐の玄宗實録にある突厥の葛邏祿の首領に裴羅達干が居るのを引いている。唐書の突厥傳に見える突騎施、黑姓可汗に阿多裴羅がある(郎案・百衲本「新唐書」二百十五下突厥列傳第一百四

十下、十紙表に「乾元中（A.D.七五八〜七六〇年）黒姓可汗（突厥別種）阿多裴羅、猶能遣使者入朝」とある。また同鶴傳に骨咄祿毗伽闕可汗の名前があるが（郎案…百衲本「舊唐書」一百九十五、列傳第一百四十五、廻紇列傳に「天寶初、其酋長葉護頡利吐、發遣使入朝、因冊奉義王、三載擊破枝惡密、自稱骨咄祿毗伽闕可汗、又遣使入朝、因冊爲懷仁可汗」とある）骨力裴羅に当るとしている。又一方では將軍鼻施吐撥裴羅という名前もあるが「大唐會要」卷九十八に回紇演者裴羅と有り、「冊府元龜」卷九五五に突厥首領を記して、采施裴羅という者が記されている（郎案…余が架蔵する中華書局影印本、第十二冊卷九五五は總録部、託孤にしてこの記事を載せず、卷九五六外臣部種族、突厥の部にも見えず、未詳）、「冊府元龜」の卷九七一及び九七二にも回紇使臣を記録して、阿徳近支伽裴羅、俱裴羅、裴羅達干等が見ている（郎案…「冊府元龜」卷九七一、外臣部、朝貢四に「上元元年（A.D.七六〇年庚子）九月、廻紇使二十人於延英殿通謁、十月、廻紇使近支伽裴羅等七人、於延英殿朝見」とあり、同書卷九七二、外臣部、朝貢第五にも「唐代宗、大曆八年（A.D.七三三年癸丑）廻紇遣使阿徳俱裴羅來朝、引見于石銀壹門」また「大曆九年（A.D.七七四年甲寅）三月「廻紇遣使裴羅達干來朝、翌四月廻紇使裴羅達干還」とある）。この裴羅は突厥種族中の人名なのである。將軍の呼称についても、突厥回紇の種族の中にも己にこの名前がある。こうした裴羅將軍一城は當に西突厥或いは唐の故名であると考えられ、遼金時代の間に西域人は猶此の裴羅の名前を以って之を呼んでいたことがわかる。この八喇沙袞は元の人たちが略称して八里沙とも云っているが、此の八里沙も地名の源流を追尋することができる筈である。更に地理上に言及しているところによれば、則ち三つの証拠があるのであり、その一つは唐志が引用している賈耽の「皇華四達記」（諸橋漢和に曰く）「賈耽、唐南皮の人、字は敦詩、諡は元靖、天寶中、明経に挙げられた。官は貞元の間同中書門下平章事、順宗の時左僕射。学は地理、陰陽に通ず（「新唐書」、一百六十六、「旧唐書」、一百三十八）」に云う。即ち、熱海、（憑承鈞、「西域地名」に云う。Issik kul今の中央アジアの伊塞克湖、突厥語で意味は熱海とある。早く「漢書」卷

七十の「陳湯傳」のなかに見ており、閼池と称している。「西域記」には大清池に作り、或いは熱海と名づけている。「経行記」や賈耽の「四夷路程」には熱海と作っている。「明一統志」は熱海に作り、その地の胡人はまた息渴兒と名づけている。亦この息渴兒はその音訳であるという。漢代に又、蒙古語を用いてこの息湯兒をとって称呼している。「西域水道記」には特穆爾圖淖爾(Temurtu)とも、亦、圖斯摩爾と云う。「西域圖志」には圖斯庫勒に作っている。』に到達して後百八十里溪谷を出ると、裴羅將軍城に至ると云う。又西方に行くこと四十里碎葉城〔憑承鈞「西域地名」に云う Tokmak 「西域記」に素葉城、「経行記」及び「新唐書」には碎葉城としている。その地は熱海の西に在って、その故址は今でもソ聯トルキスタンの克瑪克(Tokmak)地方に存在している。格勒納爾は誤ってこの碎葉城を西遼の都城と云っている』に到達するが、この城北に碎葉水があるし、さらに北方に四十里行くと羯丹山がある。この山で、十姓可汗が君長を擁立する儀式を行った所であると云う。このように考えてくると、熱海は今云う所の特穆爾圖泊に当り、碎葉水は今の吹河に当ると考えられる。この裴羅將軍城は吹河の南に位置すると云っており、尚且つ、「元朝秘史」卷五に、王罕また逃走して回回地イストラムに去ったが、垂河に出会って、合刺乞塔〔憑承鈞「西域地名」に云う。「karakhitai」遼史〕に西遼と云う。「黑韃事略」には呷唎吸給、西遼の最も早い時期の訳名である。此れは黒契丹を指しているのである。「西使記」にはそこで黒契丹に作っているし、「元朝秘史」には合刺乞塔、または合喇圪塔に作っている。「元史」岳璘站穆爾傳に、又西契丹に作っている。その指すところの領域は畏兀兒を包括し、河中(Tsen Koxania)と花刺子摸(khwarizm)などの地をも含むしている。』の種古兒皇帝の処に赴いたという。(卷六、蒙古文も同じ)。又、「元朝秘史」の卷八に乃蠻は以前に魯克を出て、委兀合兒魯種の地を過ぎて、回回の地に到った。そこは垂河に面し、さらに行くると合刺乞塔種の人古兒罕と相逢したのであった。こうした記事を考察してみるのに、垂河とあるのは吹河を指し、合刺乞塔は即ち黒契丹であること間違いない。蒙古人はこの合刺乞塔をもって西遼の古兒皇

帝、古兎竿を呼んでいると思われる。そうだとすると耶律大石自ら号して葛兎竿（遼史の天祚紀を参照）といったのに当るわけで、闊兎竿（「元史」の曷思麥里傳に出る）のように記載しているのと同じである。この地は西遼の都城のあった処で、吹河の畔りにあることになる。長春師の「西遊記」に次の様に言っている。「西南の方向に行き板橋を過ぎて河を渡り、夕暮に南山下に到達した。」と。この地が大石林牙の地で、その河を亦吹河と謂っている、と。又、常徳の「西使記」にも契丹の故址居城に河があって、「その流れは洶々として東に注いでいる。亦その河は葉河また碎葉河の略である」と謂っているのも、一つの証拠となるだろう。今、吹河の南は亦天山山脈があつて、ヨーロッパ人たちはこの山脈を阿歴山大嶺と呼びなしている。長春師の「西遊記」に云うこの南山は即ち此の天山、阿歴山大嶺を指しているのだろう。常徳の「西使記」に次の様に云っている。「この二つの山脈の間には土地が平潤で住民も夥しく、灌漑用の溝洫が帯のように伸びて天空を映している」と。即ち、南山と河水の北の羯丹山とを兼ねた光景を叙しているわけで、こゝした言辞も第二の証拠になるだろう。「唐志」によると、裴羅將軍城から咂羅斯（憑承鈞「西域地名」に云う。Talas. 一つには河水の名前だと云い、また一つには城の名前だとも云う。「前漢書、陳湯傳」に都頼水および郅支城に作っている。「西域記」には咂囉私に作り「慈恩傳」には咂羅斯に作る。「経行記」、賈耽の「四夷路程」には咂羅斯に作る、「新唐書西域傳」には咂囉私、また怛邏斯城に作っている「西突厥傳」には邪羅斯川に作り、「西使記」には塔刺寺に作り、「西遊録」には塔刺思、「西遊記」には答刺速没鞏に作ってもいる。「清一統志」には塔拉斯河、塔拉什城に作っている。河水の名称は、今も尚變っていない。その城の名は即ち中央アジアの阿薩克斯坦の奥にある利阿塔（Arlata）に當り、現在の名は江布爾城である。その間の距離は凡そ三百五十里であつて、玄奘の「大唐西域記」及び「慈恩法師傳」によると、則ち、五百八、九十里もあると記述している。これら大唐西域記にしても、慈恩法師傳にしても裴羅將軍城の文字は無い。今や、素葉水城から咂囉私に到る迄の道程里數に、四十里を加えて之を計算すればよ

いわけである。大略、賈耽の記載する里数をおおむね玄奘の記す里数と比較検討してみるのに、幾分短かいと云わなくてはならないが、當然ながら計里の単位か、或いは計算方法に由って同一でないと考えられるのである。こうしたことを徴証として、元代の人たちが記載しているところ、則ち、此の長春邱處機の、大石林牙から西行すること、七、八日で始めて、「一石城を見る」とあり、この一石城こそ呾羅斯であり、長春師の「西遊記」で前に触れた「此の天山(南山)に沿って西に向って行くと、此の南山に至るが、忽ち南に去れば、乃ち並びに西、南山に行く」とある。玄奘の「西域記」の、素葉より呾邏私に至る道は皆西に向って行くと云っている。呾邏私に至った後に西南方向に行けば密合である。一方、常徳の「西使記」によると、二月二十四日を以って亦堵を過ぎ、二十八日に塔頼寺を経過した、とある。この塔頼寺こそ、長春師の見たところの石城であった筈で、その間の行程の遅速があるのは、長春師の場合は車行であって、常徳は馬を利用して行ったので、遅速があり、同じではなかったと考えられる。即ち例えば、呾羅斯から賽藍(憑承鈞、「西域地名」に云う。Sairam、一つに湖の名と云っている。即ち、長春師の「西遊記」の天池にあたり、今の新疆省伊寧縣北面山中の賽里木湖と考えられる。キルギス人たちの云う色忒庫爾(Satku)がそれで、中国語で云えば「乳海」である。この色忒庫爾の名は、亦海屯の「行記」と「史集」のなかに見える。また一方では城の名前とも云っている。史籍のなかで、著録してあるものが二ヶ所あり、その一つは新疆省の拝城縣で縣治の東に存在している。「元史」には唆里迷國に作り「西域圖志」には賽里木に作っている。すなわち賈耽の「四夷路程」の俱毘羅城がそれに当る。今は賽里木と称している所がそれである。長春師の「西遊記」には塞藍と作り、常徳「西使記」と「明史」に賽藍に作る。亦、「元史、西北地附録」には賽蘭に、また「明史」に賽夷とも作っている。此のサイラン城は中央アジアの奇姆肯特(Chimkent)東、十三英里の地方にある」。この間長春師の行程は五日であり、常徳の方は僅かに三日しかかからない。この賽藍から尋斯干まで、長春師は十四日の行程であったのに、常徳は八日しかかかっていない。こう

した例でその理由を考えてみるのに、常徳の五日の行程は長春師の七、九日の行程に相当する筈である。こうして、「西遊記」と「西使記」の二つの書物の記している所、裴羅將軍城、(西遼の都城)から咄羅斯までの行程は、唐の時代の人が記載した裴羅將軍城から咄羅斯に到る迄の里数とが相応するのであって、これが第三の証拠である。ただ、此の種の証明といつても、亦碎葉城に適用し得て、八喇沙袞の名が裴羅將軍の四字と対音をなしているのが最も密接であり、自然と碎葉城を捨て此の裴羅將軍城を取らざるを得ないわけである。さて考えてみると、隋、唐時代以来、熱海以西の多くの都城のなかで、碎葉城をもって、大突厥が盛んな時に己に一大都会をなしていたことが知られている。「慈恩傳」に言っているのだが、素葉水城に到り突厥可汗に面会したという。農耕、遊牧畜産、軍馬の飼養などは盛んであり、唐の高宗の時に及んで既に賀魯を滅ぼして、安西都護府を龜茲キズルに移し、碎葉城をもって四鎮の一つに備えた。「唐書」、西域傳に詳しい) 調露年中(A.D.六七九年己卯) この安西都護の王方翼が碎葉城に四面十二門を築き、そのの城壁を屈曲させ、隱伏の狭間などの設備を施した。「唐書」地理志と、王方翼傳を参照のこと)。「郎案「舊唐書」、卷百八十五、上、列傳卷第一百三十五上、王方翼傳に云う。「王方翼、并州祁人也、高宗王庶人、從祖兄也。(中略) 方翼為副兼檢校安西部護、又築碎葉鎮城立四面十二門、皆屈曲作穩伏出沒之狀、五旬而畢。西域諸胡競來觀之、因獻方物。」後に突騎施烏質勒が碎葉城の北西に屯營して、しばらくして攻撃を始めて碎葉城を攻略したことがあった。因って徒り住んでこの城に據ったことが「唐書」の「突厥傳」に見えている。開元十年(A.D.七二二) 十姓可汗は請うて碎葉城に居住していた。安西節度使の湯嘉惠は表を奏して焉耆カウチヤールをもって四鎮の備えとなし、「唐書」、西域傳) 後の突騎施別種、蘇祿子吐火仙が嗣いで、また碎葉城に居た。「唐書」、突厥傳) 天寶七年(A.D.七四八) の始、北庭節度使の王正見が碎葉城を毀すこととなった。(通典一九三に引くところの杜環「経行記」のなかに見えている)。「郎案…「通典」、卷一百九十三、邊防九、石國の條に杜環経行記云「其國城一名緒支、一名大宛、天寶中、鎮西節度使高仙芝、擒其王及妻

子歸京師。國中有二水、一名眞珠河、一名覺河、並西北流、土地平散多縣、實出好犬良馬、又云、碎葉國、從安西西北千餘里、有敦連嶺、嶺南是大唐北界、嶺北是突厥騎施南界、西南至葱嶺、二千餘里、其水嶺南流者、盡過中國、而歸東海。其海在山中、春夏常雨雪、故曰、雪海、中有細道、道傍往往有水孔、嵌空萬仞、轉墮者、莫知所在。牧達嶺北行千餘里、至碎葉川、其川東頭有熱海、茲地寒而不廩、故曰熱海。又有碎葉城、天寶七年、北庭節度使王正見、爲伐城壁摧毀、邑居零落、昔交河公主所居止之處、建大雲寺、猶存。其川西、接石國約長千餘里、川中有異姓部落、有異姓突厥。各有兵馬數萬、城堡間雜、日尋干戈、凡是處人皆挽甲冑、專相虜掠、以爲奴婢。其川西頭有城、曰名怛羅斯、石國人鎮、即天寶十年、高仙芝軍敗之地、從此至西海以來、自三月至九月、天無雲雨、皆以雪水種田、宜大麥、小麥、稻禾、豌豆、畢豆、飲葡萄酒、麪酒酪乳」と。

後に葛祿が亦此の地の碎葉城に據り、唐代の中期以後西域とこの地を隔絶してしまつて、遂に消息を聞く所がない有様であつた。耶律大石の時に及んで既に西域を平定した。考えてみるのに復、契丹の故地であるから、そこで東に移動して此の地に徙つたのではないだろうか。

然し、碎葉城を都にしないで、その東南四十里の処にある裴羅將軍城に居住していたらしい。蓋し此の裴羅將軍城が唐の時の碎葉故城で、すでに毀壞されて城の跡が余す処なくなつていたために、移つていたのだろう。「金史」の忠義傳の言うところによると、「契丹が居住するところの屯營は馬に乗って騎行すれば、朝から日中に到り始めての周辺に近付ける、」(郎案・百柄本「金史」百二十一、列傳第五十九、忠義一、粘割韓奴列傳に「耆老相傳、先時契丹至不能拒、因臣之。契丹所居屯營、乘馬行自旦至日中、始周匝」とある。)則ち其の規模の廣大なため當に遠く、唐代の碎葉城を経過している筈であること、ことさら云う迄もないし、裴羅將軍城であつた筈である。「遼史」の天祚紀に據ると、大石が即位して、此処で直魯古の歿すにいたる迄凡そ七十八年間(郎案・百柄本「遼史」三十、本紀第三十、天祚皇帝四に「冊立大石爲帝(中略)改延慶爲康國元年。(中略)康國十年

歿、在位二十年、廟號德宗。子夷列年幼、遺命皇后（中略）號感天皇后。稱制改元感清、在位七年。子夷別即位（中略）在位十三年歿、廟號仁宗。子幼遣詔以妹普速宗權國、稱制改元崇福、號承天太后（中略）在位十四年。仁宗次子通魯古即位、改元天僖。在位三十四年」とあり、静安先生の、大石より此拠に遼の直魯の亡ぶに到る凡七十有八年」とあるが、上記の記載を綜合計算すると八十八年になる。静安先生の錯誤か、未詳、しかも都はまだ東に徙さない時に、則ち都を尋思干に置いていたことになる。此の事がまだ「遼史」のなかに見えないのだけれども、班師が東帰するのに騎馬行で二十日にして善い土地を見出したとあるが、正に長春師の「尋思干の詩」のなかに見える、所謂大石の東を経過すること二十程とあるのに相合致するのである。だから西遼が名前とした尋思干を河中府としていて、東に移徙した後、陪都として造宮したのに当るわけである。だから、長春師のこの「西遊記」に西南方向をとり尋思干に到る、都をはなれて萬里の外で回紇人にとって最も住み良い場所契丹の都とした、と云っているのも当然ある筈だ。即ち、それを西都という言葉で云っている、耶律文正の「湛然集」卷二に「裴子法見に和して寄する詩」に云う。

從客遊大石、原住民に從つて大石に遊行した

扈從出天山、皇帝に從たがって天山山脈を出る、

とある。この大石は尋思干と謂っており、蓋し、尋思干と虎思斡耳朶とを、契丹の東西に分れた二つの都京としているわけである。故にいずれも大石と云う名前を得ているわけだった。西遼の都城は昔から今まで、まだはっきりと本当のことがわかっていないので、聊かその概要を記してみたのである。

〔本文〕其國王、遼後也。自金師破遼、大石林牙領衆數千、走西北移徙十餘年、方至此地。其風土氣候與金山以北不同、平地頗多、以農桑爲務、釀葡萄酒、果實與中國同。惟經夏秋無雨、皆疏河灌溉、百穀用成。

〔口訳〕その國王は遼朝の後裔である。金の軍勢が遼朝を破ってから、この大石林牙は數千人の住民を擁して、

西北方向に逃走して、移遷してから十餘年を経て、方に此の土地に到達したのだった。その風土、氣候の様子は金山以北の地と同じではない。平地が大変多くて、農業養蚕を務めとしている。また葡萄を醸して酒としているが、その葡萄の果実は中国と同一である。考えてみると夏と秋の季節は雨が降らず、そのため疏水河川を灌漑し百穀物いろしうなが利用され栽培されている。

〔王觀堂先生の注記に曰く〕「通典」卷一九三の石国の條に引用した杜環の「經行記」の末尾の文章に曰く、「碎葉川より西海に到る迄の地域は、三月から九月まで天空に雲がでたり、雨が降ることもなく、そこで灌漑用水には雪解け水を用いて苗代を作る。この地に大麥、小麥、稻禾、碗豆、畢豆などの栽培に適しているし、人びとは葡萄酒、麴酒(大鹿の乳で造った酒)、醋ヨリケルト乳を好んで飲用している」と。

〔本文〕東北西南、左山右川延袤萬里、傳國幾百年、乃滿失國依大石、士馬復振盜據其土、繼而算端西削其地、天兵至乃滿、尋滅算端亦亡。

〔口訳〕この地の東北から西南に涉り、左側に山脈が走り、右側に川が流れている地勢で、延碗として萬里にわたって拡がっている、國を継承すること幾百年であったが、乃滿一〔郎案・乃滿は乃蠻ナイマンか、(諸橋漢和に曰く)、「乃蠻、部落の名、外蒙古西部の地を據有して居たが、太陽汗に到って、もとの太祖に滅ぼされた。

〔元史〕、太祖記、「汪罕出走路逢乃蠻部將、遂爲其所殺」)は元に滅ぼされて國を失ったが、大石に庇護を求めて據居して、士馬の意気が頗る振復興した。そこでその土地を大石から盗んで據居して支配を継承した。次いで算端スンケンが西でその地を削って勢力を示していた。元の軍隊は乃滿の占拠地にやって来て滅ぼし、次いで、算端を滅亡させた。

〔王觀堂先生の注記に曰く〕「遼史」の天祚紀によると、仁宗の次子直魯古が即位して、年号を改元して天禧と稱した。位にあること三十四年の折、秋に田獵に出掛けた。ところが乃蠻部の屈出律は途中で伏兵八千をもって

襲い擄虜にして、王位に登ったとある。〔郎案、百衲本「遼史」三十、本紀第三十、天祚皇帝四七紙裏の記事〕。「元史譯文證補」の太祖本紀、龍の年、乃蠻の太陽汗古出魯克が西方に奔逃したので、哈刺乞罽古兒汗がそれを収撫して、義理の父子の契りを結び、自分の娘を嫁にしたのであった。鼠年、哲別が古出魯克を逐い出したので、巴達克山の撒里黑庫爾之池にいたり、その古出魯克を殺害した由を載せている。

〔郎案…「元史譯文證補」卷一上、太祖本紀、羊年（録無年、但云後）帝與汪罕合兵、攻乃蠻、乃蠻主亦難赤汗、先卒。二子曰太陽汗、曰不亦魯黑汗、太陽汗名太亦布哈、受金封爵、爲大王、故曰大王汗。蒙兀人訛爲太陽汗、乃蠻有古出魯黑、不亦魯黑之稱號（稱義詳部族考、〔郎案、これは「元史譯文證補」、卷二十九、部族考を闕失す）故其弟曰不亦魯黑汗（「秘史」、稱古出古敦、不亦魯黑、則古出古敦、當爲其名）…卷二、太祖紀下、龍年（中略）冬復征汪克塔、古出魯克。前鋒遇衛刺特部、其酋忽都哈別、乞不能戰、遂降用爲鄉導至也、兒的石河殺汪克塔於陣、古出魯克從者無多、西奔。哈刺乞罽古兒汗收撫之、爲義子嫁以女、（詳見下文）

是より先、古出魯克は古兒汗が無能であることを知っていたので、東方属部の族は皆叛乱を企てて蒙古に服従した。

そこで西域も亦叛乱を企てたと云ふ。又聞くところによると、其の父が敗残し、旧部族の人たちが尚遺存していたので、藏匿思はその部族の衆を得て其の国土を奪回した。そして、古兒汗に言うことに「わたくしが故郷の旧地を離れてから既に久しい年月が経っている。今や蒙兀兒が乞罽の地を征伐しているので、現在の状況に便乘してわたくしは葉密里哈に往って、克別失八里を押し立て、潰滅遁走した兵卒たちを招集したならば、きつてやると来るに違いない。だからその兵力を藉りて以って本國を防衛するのがよろしかろう」とあった。古兒汗はその言行を信用して、既に東方に行進したところ、果して乃蠻族の旧の兵衆がやって来たので元の通り大軍となった。

そこで貨勒自彌の使者に出逢ったので、共に謀り克兒汗と相談約束して、即座に東西の双方から俠撃しようという約束が成立したのだった。その相談がすでにまとまったので、克出魯克は即座に八喇沙袞に進軍して、古兒汗と一緒に戦ってこれを敗った。古出魯克は退いてそこで軍兵を集合させ、貨勒自彌と徹馬爾干の兵とを合せて已に塔刺思に到達したのだった。そこで古出魯克はこの機会に乗じて再び進撃して古兒汗を占領して捕虜としたのだった。表面では尊崇の態度を示したのだが実際には國を篡奪しようとする考えであったのである。二年を経過した後、古兒汗はそのことを心配し、また恚意を燃していたが遂に没した。そこで古出魯克は既に古兒汗の位を奪い得、皇帝として民間人が佛教を信奉していたのを漢罕默德(マホメット)の教に信奉せざるを得ないように勅諭したのであった。民間に佛教を奉ぜしめたので、帝太祖は之を聞いて哲別を派遣して、古出魯克を征伐させた。当時喀什噶爾カクガール到達する前に、先ず遁走してしまつた。ところが、遁走の沿道の住民たちは彼を許容しようとしなかつた。丁度巴達克山に入ろうとしたが、元軍の哲別將軍は撤里黑庫爾山に追い込み、その山道の狹隘な處で捕えて古出魯克を殺したと云う記事がある。

〔郎案、「元史譯文證補」卷一、太祖紀下、七紙—先皆古兒汗屬地、謨罕默德貨勒自彌沙(即帝親征之西域)奉父遺命、亦歲貢三萬的那於古兒汗(的那金錢名)既而吞併近境、國益強大、遂不納貢、又攻取布哈爾各城、勿從古兒汗、乃有撤馬爾干西譯斯滿、亦來合復通好於古出魯克、使者往遇諸塗。先是古出魯克、知古兒汗無能爲東方屬部皆叛從蒙兀、西域亦叛、又聞其父敗殘、舊部尚在藏匿思、其衆以奪國土。言於古兒汗曰、我離舊地已久、今蒙兀爾往征、乞解乘、今之時我往葉密里(句)哈押立克(句)別失八里、(上二地別有考、別失八里見釋地)招集潰卒衆、必來從可籍其力、以衛本國。古兒汗信之、既東行、乃蠻舊衆果來附。遂肆劫掠復遇貨勒自彌沙之使、欲共謀古兒汗、即約東西夾攻、西勝則西軍拓地、至阿力麻里、和闐、喀什噶爾。東勝則東軍拓地、至費那克特河(河名無考當、在錫爾河西)議既定。古出魯克即進攻八喇沙袞(西城史云、西

遼都城云名、遼史則云虎思斡耳朵。古兒汗與戰敗之。古出魯克退而集衆、而貨勒自爾與撒馬爾干之兵已至、塔刺思擒古兒汗之將、曰塔尼古、古出魯克乘機再進、獲古兒汗、陽爲尊崇、實則篡國自立。越二載、古兒汗以憂恚卒。（此與遼史乘、直魯古出獵襲執之略異、而尊爲太上皇、朝夕問起居、則語意相類）古出魯克既得位、復娶一妃勤以從佛教（妃名原文已缺）、由是諭令民間奉佛、不得奉謨罕默德（天方教主名）、暴斂橫徵每一鄉長家以一卒監蒞之、自至和闐論民改教、出示招集謨罕默德教、人辯論教理、衆皆至。其爲首者曰、阿拉哀丁與古出魯克、往復申辯詞不屈、古出魯克慚沮愆怒、而縛之、釘其手足於門。衆情咸忿、而無如何惟望。帝軍之至、帝亦聞之、故遣哲別往征、哲別示諭民間各守舊教、從其先世所奉勿庸更易。於是各鄉長、皆殺監蒞之卒、爲應古出魯克、在喀什喝爾軍、未至先遁。（天山以北、西遼故都之地、若何攻取、則各書各未言及、但言天山以南）沿路居民、皆不容納、將入巴達克山、而哲別追求於撒里黑庫爾山、徑窄溢處殺之。（云是報應、蓋天方教人語也。案此節、必是拉施特增入、非國史所載。哀忒蠻譯述、則云古出魯克至西遼將謁古兒汗、慮有變、令從者僞爲已入謁、自爲從官立門外、適古兒汗長妃之女、格兒八速自外至、心異其人、入而詢得其故、乃延入格兒八速、以女晁忽嫁之、三日即成婚、晁忽時年十五。勤其夫、勿信天主教、從佛教、並以古兒汗、年老好諛告其夫、以趨承之道餘云云。同古出魯克、既出於葉密爾三處收集舊衆、即至鄂斯懇、奪西遼之庫藏、攻八拉莎袞爲西遼所敗。其時西域軍已至塔刺思、擒塔尼古八拉莎袞之民、聞警城守、不令鄂斯懇潰卒入城、潰卒之師謨罕默德、太石率衆圍攻十日、以象毀門而入、大掠三日、繼而部下復叛其師、古出魯克聞亂亟、進擊獲古兒汗。時天方歷六百八年、西曆一千二百一十一年、二月、直魯古遂讓位、古出魯克尊爲父、仍稱爲帝、而自執國事、直魯古憂悶成疾、越二歲卒在位三十五年。古出魯克又娶西遼宰相之女、甚美、餘皆同、謂是志費尼書中所云。又撒里黑庫爾道上地名、韋拉特尼山谷、幽僻可入不可出、古出魯克匿於中、哲別遇牧羊人、詢知蹤跡、令獵者導路獲而殺之。葉爾羌等處、悉定爲帝。虎年之事。案遼史、直魯克在位三十四年、此

多一年、其云西曆一千二百十一年、爲太祖六年辛未。錢詹、事大昕諸史拾遺、謂西遼之亡、當在辛未、諸家編年皆係以辛酉、係誤得此、可爲確證。拉施特謂古兒汗以女、嫁古出魯克、他書有謂孫女者此乃是外孫女、恐哀忒蠻誤譯、或是長妃格兒八速、而誤謂長妃之女也。)

〔口訳〕先に全て古兒汗に属するの地に溟漠默徳の貨勒自彌沙(注、即ち威吉思汗の親征した西城のイスラーム教の王)父の遺命を奉じて亦古兒汗に歳貢すること三萬的那(注、的那は金鍼の名)であった。既にして近境を併吞して国が益々強大になったので、貨勒自彌沙門遂に古兒汗への歳貢を納めなかったのみか、又布哈爾令の各城を攻め取り、古兒汗に服従することがなくなった。そこで撤馬爾于の酋長諤斯滿が亦やうて来て復古出魯克と通好して使者が往来して諸塗で遇ったりした。是より先に古出魯克は古兒汗の無能なのを知ったので東方の属していた部族が皆叛いて蒙古に服従した。西域も亦叛乱を起こした。又其の父も敗残したが、旧部族は尚蔵匿思にあるのを聞いて、その敗残の部衆を得て以て國土を奪おうとした。古兒汗に言うのに、「私は旧地を離れてから既に久しいのですが、今蒙古の遠征で和解を乞うて居ります。今この時に乗じて、我が葉密里、哈押立克、別失八里(注、上の二つの地は別に考察し、別先八里は釋地の項を参照)に行き、潰滅した兵卒は方を招集いたしますと、必ずやうて来て従軍すると存じます。その衆の力を藉りて本國を防衛できずありませんよう。」とあった。古兒汗はこの言を信用した。既に東へ行くと、乃蠻の旧部隊の衆が来り服属した上、遂に劫掠を肆にした。復そこで貨勒自彌沙の使者に逢ったので、共謀して事を計ろうとした。古兒汗もすぐに約束して、東西から夾撃して、西側の軍が勝てば西軍が土地を開拓して阿力麻里、和闐、喀什噶爾に至る部分を取り、東軍が勝てば地を開拓して費那克特河までを領有するとした(注この河の名前はどこに当るのか考察のしようがないが、錫爾河の西に当る河か)既に約束が定まったので古出魯克はすぐに八刺沙袋(注、西域史に云う、西遼都城の名とある遼史の云う虎思斡耳朶に当る)に進攻した。そこで古兒汗と戦って之を敗った。古出魯克も退いて兵士たちを集

め、そうして貨勒自彌、撤馬爾干の兵が既に塔刺思に到着して、古兒汗の將の塔尼古を擒とりこにしてしまった。古出魯克がこの勝利の機会に棄じつ再進し古兒汗を捕虜とし、陽おもちには尊崇しているように見せかけて、實際はその国土を篡奪して自立するに到った。二年も経って古兒汗は憂愁と恚意のために卒みまかった〔注、此の記事と、遼史の天祚紀に載っている史実、直魯克が彼の獵に出ていた間に急襲して彼を捕えたところと異なる。而して尊崇した由に、直魯克を太上皇と崇まい、朝夕起居の様子を問うたところがあるが、これで見ると語意が両方同じ〕古出魯克は既に王位に即いて復、一人の妃を娶めとったが彼女は彼に、佛教を信奉する様勧めた〔注、妃の名前は遼史の原文では已に欠けている〕是によって勅諭して、民間に佛教を信奉せしめて漢罕默德〔注、イスラーム教主の名でマホメット〕を信奉してはならないとし、横暴徽斂を極めて、一郷の村長の家に一人の兵士をつけて監視したのであった。和闐ハチンに至る迤人民に改宗する様に説諭して、イスラーム教徒を召集して、その教理を辯論させるに至った。そのため、その信者の首かぶに立つ者が云うのに「アラ哀丁が古出魯克とが詞をつくして辯じたら決して屈服しないだろう」とあった。古出魯克はだんだん意氣沮喪し怒って罵言雜言した揚句、その首長を縛って、其の手足を城門に釘付けにしたので大衆は激昂して皆憤怒して、全く望みを絶ってどうすることも出来ないと言いつつ合った。蒙古の軍勢がやって来て成吉思汗も亦このことを側聞した。そこで將軍哲別を派遣して征服に乗り出した。哲別は民衆の間に勅諭を發して、各自が旧教のマホメット教を守り、先祖代々から信奉した教をないがしろにしたり改宗したりしてはならない、と告げた。是において各郷の村長は監視していた兵士たちを殺すに至った。そのため古出魯克は喀什噶爾に在った軍隊が援軍のために出発して未だ到着していないのにまづ遁げ出した。〔注、天山以北の西遼の故都の土地で、若しどうして攻取ったのかについて、各々の書物は言及していないが、但天山以南について言及している。〕遁げた沿道の居住民たちは彼を保護しようとする者もなかった。將に巴達克山に入ろうとした折に、哲別が撤里黑庫爾山の山路の挾隘な所に追求して捕えて殺害した。〔注、このこ

とは天罰應報と云うべきか、とマホメット教徒の語る所である。この文章を考察してみると、必ずこれはラシド
 が「史集」に加えて挿入した文章で、蒙古史、遼史の所載文であるまい。哀忒蠻の沢述文には次の様に云う。古
 出魯克が西遼に至り將に古兒汗に拜謁した時に、異変の事の起るのを慮って従者をして自分と偽って謁見の間に
 入らずに、自分は従者と装って門外に待っていた。適^{たまたま}、古兒汗の長妃の娘、格兒八速が外出して門に到った。
 不図その人が他と異なっていると思い、入室してその理由が判った。そこで入廷させて、格兒八速は、娘の晃忽
 を嫁にしようとした。三日たつてすぐに結婚したのだったが晃忽は時に十五歳だったと云う。彼女は夫の古出魯
 克に天主教を信仰してはいけはい、佛教を尊崇すべきだと勧めた。並びに古兒汗は老年となつて阿諛を好んだの
 で、その夫に告げて敬して遠去ける道を説いた云々。同じく古出魯克は既に葉密爾の三ヶ所で旧の兵士たちを収
 集して、すぐに鄂斯懇に至り西遼の庫藏を略奪して八拉莎袞を攻撃したので、西遼の敗北する所となつた。その
 時西域の軍隊が塔刺思に到つて、塔尼古、八拉莎袞の民を捕虜とし、城を警戒する守りが鄂斯懇の敗残の兵の不
 備によるのを聞いて入城した。その敗残の將軍は、漠罕默德太石が衆を率いて包圍攻撃し、十日を経て象軍を用
 いて門を毀して入城し、大規模の略奪が三日も続いて、部下が復反乱を起したのを聞いた。古出魯克はその乱を
 聞いて直ぐに進軍して古兒汗を捕虜とした。その時が回教曆六百八年、西曆一千二百一十二年に当る。直魯古
 は遂に王位を讓つて、古出魯克はその父と尊んで、そこで皇帝と呼んだのだが、自ら国政を執りしたので、直魯
 古は憂悶の余り病氣となり二年後に歿した。在位三十五年であつた。古出魯克は又、西遼の宰相の娘の甚だ美人
 を娶つた由でその他のことは皆同じである。このことは志費尼の書中に云う所である、又撤里庫爾の途上の地名、
 韋拉特尼の山谷幽僻で入ることが出来ても出ることのできない秘境で、古出魯克がその山谷の中に匿れていた。
 哲別將軍が遇またま羊飼いに逢つて、その辿れる道がはっきり判つた。そこで獵師に道案内をさせて彼を捕獲し
 て殺した由である。葉爾恙等の所は悉く判つていて、この事は成吉思汗の虎年の事、(戊寅歲 A.D. 一二二八年)、遼

史を勘案すると、直魯古の在位は三十四年であって、此れは一年多く、西暦で一千二百十一年のことで太祖六年辛未（A.D.一二二一年）に当る。錢（詹事）大昕、「諸史の拾遺」に西遼の滅亡がまさに辛未の歳に当たっているとす。諸家の編年皆辛酉（A.D.一二〇一年）に関係させていて、誤謬を犯している。此れの確證となすべきものが拉施特の「史集」で、古児汗の娘をもって古出魯克に娶らせるとあり、他の書物では孫娘と云うのもあって、すなわち是の外孫の娘、哀忒蠻の誤訳であろう。或いはこの長妃格兒八速が誤って長妃の娘と云ったりするのと同じである。」

〔本文〕 又聞前路多阻、適壞一車、遂留之。十有八日沿山而西七八日、山忽南去、一石城當路、石色盡赤。

（口訳） また聞く所によるとこれから先の道は險阻な処が多いと云う。ところが偶然ながら一つの車輛を壊してしまったので、遂にこの地に留ることになった。十八日には出発して、山に沿って西に向って行くこと、七、八日にして山は忽然として南の方に姿を消し去ってしまった。一つの石城があるが、この路に面した石の色は盡く赤色であった。

〔王觀堂先生の注記に曰く〕 この一石城は即ち呾羅斯城のことである。「大唐西域記」によれば「素葉水城から呾邏私に行くには皆西の方向に進む」とあるが、呾邏私より往くとすると西南方向が正しいので、此の文と一致している。〔郎案〕 大唐西域記卷一、「素葉水城西行四百餘里、至千泉、千泉者地方二百餘里、南面雪山、三垂平陸、水土沃潤、林樹扶疎、暮春之月雜花若綺、泉池千所、故以名焉。突厥可汗每來避暑、中有群鹿多飾鈴鑲、馴狎於人、不甚驚走、可汗愛賞下命群屬、敢加殺害有誅無赦。故此群鹿得終其壽。」と云っている。〔解説西域記〕（堀謙徳師著、昭和四十六年九月、国書刊行会刊行）の注釈を次に掲げる。

〔堀謙徳氏の考證に曰く〕 素葉城より西行四百餘里にして千泉に至る。千泉は南に山脈あり、三方は平地にして泉池甚だ多く、突厥可汗即ち土耳其民族君長の避暑地たり、慈恩傳には「自此（素葉城）西行四百

餘里、至屏聿、此曰千泉、地方數百里、既多池沼、又豊奇木、森沈涼潤、即可汗避暑之處也。」といひ、千泉の原音を屏聿となせり。泉池多きを以て此名あり。千泉の位置につきてはジュリアン氏はカラ湖(Karakul)の南方に位するミン・ブラク(Ming bulak)なり(julien Memoires, I. 13. note)とすれども、此地は素葉城より西北に當り「素葉城西行四百餘里至千泉」の本文に合はず、ブレットシュナイダー氏は千泉の位置を以て熱海の西に存るアレキサンダー山脈(Alexander Range)の北麓に在りとし(Bretschneider: Mediaeval Research, I. p. 228. note) — 「郎案」 Bretschneider: Mediaeval reserch, I, Karakhitai, (Si Liao) p. 228. note 585. を抄訳すべし。即ち「本文」此の後「カラ・キタイのgurkhanが自らの帝国のすべての地方に知事を派遣。その領域はkum-kidjikからBarserdjanまでタラスからTamidi迄に拡がっていた。(注585、タラスの例外を除いて、此処に注記された国々や場所はわたくしには未知に属している。後者の地名についてわたくしは注23に触れているので参照願いたいと思う。その注のなかで、古代のタラスの位置を回教徒の著作家たちによって残された断片的な記述から決定してみようと試みた。このタラスの町が依然としてタラスの名前をもつ河の畔りに位置していたことは疑いのないところであり、また恐らくはイリ河からサマルカンド迄に通じている大きな幹線道路上にある、現在のAulie-ataから程遠からぬ処に位置していたのだろうと思われる。注583のなかに引用した中国仏僧玄奘は紀元六三〇年(唐太宗、貞觀四年)素葉水をはなれて後、四百里西行して、水の豊富な国にやって来た。玄奘はこの地を千泉と呼んでいる。(大唐西域記卷一「素葉城西行四百餘里至千泉、千泉者地方二百餘里、南面雪山、三垂平陸水土沃潤林樹扶疎、暮春之月、雜花若綺、泉池千所、故以名焉。」)そして南に雪山が界を区切り、他の三面は開けて平坦となっている。千泉の地から西方に行くこと一四〇〜一五〇里、玄奘は呾邏私城にやって来た。その城は周圍八〜九里あって、四方からやって来た商人たちが集まり、此処で土着の人たちと雜居している」と。

〔大唐西域記卷一〕「千泉西行、百四、五十里、至呾邏私城、城周八、九里、諸國商胡雜居也。土宜氣序大同素葉」〔堀謙徳氏解説西域記、考證に曰く〕呾邏私 (Taras) の位置については、ブレットシユナイダー氏 (Medieval Research, I. 18. note, 228 note) 及スクキラー氏 (Schuyler, Turkestan, II. p. c.) はタラス (Taras) 河畔の Amie-ata なりと云へり。思ふに此市街の近くに在りし舊市は即ち呾邏私城なるべし。呾邏私城の南方にある一村落到三百餘戸あり、皆支那人なれども、土耳古民族の捕虜となりて此の地に集合せしものにして、衣食住の外形は土耳古化せるも言語作法は尚ほ支那風を存せり「唐書」卷二百十五上、突厥傳には、唐の太宗が隋代に突厥の捕虜として西域に留まれる支那人男女八萬人を歸還せしむる爲に、使者をして金帛を携へて突厥に赴かしめしを述べて、又詔隋亂華民多没于虜、遣使者以金帛贖男女八萬口、還爲平民」と云ひ、「通鑑綱目」卷三十九、唐の太宗貞觀五年 (西曆六三二) の條にも、以金帛賜突厥、贖男女八萬口」と傳へ、「慈恩傳」卷二には玄奘が素葉城に至りて突厥の護葉可汗に遇ひし際、更引漢使及高昌使人、入通國書及信物、可汗自目之甚悅、即ち漢の使者が突厥に來り、國書及び贈物を奉り、可汗大いに喜ぶといへるものは、太宗の使者が突厥に至りしをいふなり、何れにしても、玄奘が見たる三百餘戸の捕虜支那人も此時歸還せるなるべし。』とあり。』Vivien de St. Martin サン・マルタン師は、スタニスラス・ジュリアン師の玄奘大唐西域記の翻訳に補した地理学的な注記のなかに、千泉を Karakul カラク湖の南にある Ming Bulak と同一であるとし、かくして旅行者が遙か北西方向に赴くとそこで湖の他の端とヤグザルテス河の間にある呾邏私に達するとしている。併し此の見解は支持することができない。Ming bulak、蒙古語で「千泉」を意味し、他の東方の諸語もそうなのだが、蒙古平原や中央アジアの幾多の場所に用いられる名前なのである。この玄奘の云う「千泉」は南は雪山と境界し、一方他の三方が平坦となって開けているので、Issikul イッシクル湖から西に連なる高い山並みの北麓にあって、しかもロシアの地図にアレキサン

ダー山脈と注記してある所に宛嵌るように思われるのだが。多くの河川や溪谷、チュー河の支流はこれらの山脈から流れ落ちるものであり、Anlié-ataのタラス河も同じである。そのためにわたくしは、チュー河から石國(タシュケント)迄の玄奘の辿った道こそ、アレキサンダー山脈の北麓に沿うて走る全く同じ方向の道を辿ったことは疑いがないと思っっている。そして彼の云う咀邏私、すなわちタラスは現在のAnlié-ataに近い所にあつたに違いない。この咀邏私の城市はまた七、八世紀の中国の唐書に屢々言及せられていて、一般に素葉、ないし千泉の地とともに触れられている。吾々は、中世の中国人旅行家たちの大部分、例えば十三世紀に中央アジアを通過してサマルカンドへ行つた人たちが、彼らの辿った道筋に咀邏私城ないし咀邏斯水に注目しているのを知っている。石國(タシュケント)がこの咀邏斯に地方官を駐在せしめるのを常としていた由である。)

〔本文〕有駐軍古跡、西有大家、若斗星相聯。又渡石橋、並西南山行五程、至塞藍城、有小塔、回紇王來迎入館、(口訳)また軍隊の駐屯した古い跡があり、その西方には大きな墳塚があり、丁度北斗七星を連らねたような格好をしている。そこで石造の橋梁を渡って西南方向に山に並行して進むこと五日ばかりの行程で、塞藍城〔郎案…馮承鈞著「西域地名」に曰く、Sairam 一名湖の名となす。即ち「西遊記」に謂う所の天池に当り、現在の新疆省伊寧縣北面山中の賽里木湖がそれに当る。キルギス人はこの地を稱して色忒庫爾(Sutku) 中国語で云うと乳海である。この色忒庫爾(Sutku)の名稱は亦海屯の「行記」と「史集」ともに見えている。また一方では城市の名前だとも謂う。史籍のなかに著録されている二例があつて、その一つは新疆者の拜城縣に属しているもので、縣治の東側に存在し、「元史」には峻里迷國に作り「西域圖志」に賽里木に作つている。賈耽の「四夷路程」のなかに俱毘羅城とあり、今これによって賽里木と稱しているのがそれに当る。もう一つは中央アジアにある都市で、「西遊記」に塞藍に作り、「西使記」や「明史」に賽藍に作つている。また「元史・西北地附録」には

賽蘭に作っているし、また「明史」には賽夷に作っている。此の城市は現在、中央アジアの奇姆肯特 (Chimkent) の東十三哩の地方を指していると謂う。) に到達した。そこには小塔があり、回紇王がやって来て歓迎し迎賓館に入った。

「王観堂先生の注記に曰く」劉郁の「西使記」によると、「二十八日に塔頼寺 (郎案これタラス城か) を過ぎて、三月一日に賽藍城を過ぎたが、そこに浮圖 (寺院の建物) があって、諸々の回紇族が集って礼拝するところだとの説明があった」と云っている。「明史」の西域傳に謂う賽藍は達失干 (馮承鈞著「西域地名」に曰く、「Tashkent」、昔の名前は Chaj、魏書」に者舌に作り、「隋書」には石國の都、柘析城 (Binkat) としている)、大唐西域記」には赭時、「經行記」にはその國の一名を赭支と謂うとあるし、また一名を大宛とも云う。「新唐書」では柘支、また柘折ともいっている。故の康居の小王窟匿城であった所とも謂う。「元史、西北地附録」には察赤に作り、「明史」には達失干に作っている。清朝の時には塔什罕に作っている。現在ソ聯中央アジアの塔什罕がそれに当る。古代の石國の都城のあった所で今の錫爾河の支流 Chirchik 河の畔り、Binkath から程遠くない所に位置しているのに当ると謂う。) の東に在るといふ。西方に向い撤馬兒罕 (馮承鈞著「西域地名」に曰く、Samar-kand、希臘古地誌」に Marcanda に作り、元代には Semesant に作っている。「史記」「漢書」「魏略」「晋書」には康居の地に在りとなし、「魏書」には悉萬斤、「隋書」には康國に作っている。一方「西域記」に颯林建に作り、「經行記」には薩末鞬、「新唐書」には康國と曰っている。また一に薩末鞬、その地を以って康居の都督府としている。「遼史」には尋思干に作り、その地を河中府としている。(尚「湛然居士集」及び「西遊記」の記述を参考のこと)。「西遊録」には亦、尋思干に作り、「西遊記」には邪米思干に作る。「西使記」は擣思干に作り、「元秘史」には薛迷思加、薛米思堅に作っている。「親征録」には迷思干、「元史」には亦尋思干、擣思干、薛迷思干、また、「元史西北地附録」には撤馬耳干とある。「哈散納傳」には薛米則干、「郭侃傳」には換斯干と

あり、「耶律阿海傳」には尋斯干などの諸々の音訳がある。「明史」は撤馬兕罕、康居として康國の故都で今は都城の東、Afriasiab 高原の上にあると謂う。を去ること千餘里の所に城郭の跡があり、周圍が三、四里あると云う。考えてみると、此の城市の名前は未だ古書のなかに見えないし、「大唐西域記」によると「呾邏私から西南方向に行くこと二百餘里すると、白水城(馮承鈞著「西域地名」に曰く、Tajikab アラビア語で、その意味は白水である。「新・舊唐書」には白水城とあり「新唐書」では一に白水胡城に作っている。また「慈恩傳」に白水城とある。怛邏斯(Talas)の西南二百里行った所の賽里木村(Sarlam)にあると謂う。亦「元史・西北地附録」にある賽蘭城が是れであろう。またSarlamの條を参照のこと。)そこから亦さらに行くこと二百餘里、恭御城に到達した。(郎案…玄奘「大唐西域記」卷一、「西南行くこと二百餘里、至恭御城、城の周圍は五、六里であり、この地は原野が濕地帯で地味が肥えた穀物の出来る所で林樹が鬱蒼として繁っている」とあるのに應じている。)この地から南に向って行くこと四、五十里で笈赤建國に至った。亦この笈赤建國の周圍は千餘里に及んでいる。

〔郎案「大唐西域記」卷一に「この恭御城から南に向って四、五十里も行くと、笈赤建國に到達する。この笈赤建國の境域周圍は千餘里ばかりで地味は沃壤肥膏で栽培の設備が充分であって、草木が鬱蒼として繁茂し、花や果実が咲き乱れ、葡萄も多く、その種類が珍重されている。國の中には城邑が百數十もあり、各々君長が別個に支配してその往来、進止は気まま勝手で、相手の命令を受けるわけではない。各々の城邑は野原を区劃区分して支配権は別なのだが總稱して笈赤建國と云っている。(注—堀謙徳氏—笈赤建(Nijikend)の国情を傳ふるもの「西域記」以外に無く、参照比較するを得ず。〕この笈赤建國から西に向って行くこと二百餘里、赭時國、唐言で石國を云っている。(郎案、玄奘「大唐西域記」卷一に「これより西に向っていくこと二百餘里で赭時國に到達する。唐の言葉で石國と云っている。この赭時國は周圍が千餘里もあって、西の方は葉河に臨んでいて、東西が狭く、南北が長い、土地風土、氣候もよく笈赤建國と同じ環境にある。國中の城邑の数が數十もあり、各々、君

長支配者を異にして、それを統轄する總主がいるわけではなくて、突厥國に服属している。「堀謙徳氏の考證に曰く」赭時は今の「Tashkend」にして「魏書」卷一百二、西域傳には者舌とし、「隋書」卷八十三西域傳には石國となし、或は柘支といふ。赭時、者舌、柘支は同一原音の變化にして、ヒルト氏 (Fr. Hirth) は「Yash」より出でし變形とし、者舌の首府赭支は正に之に當れり (Nachworte Inschrift d. Tonjukuk, s.70) 土耳其語の「Tash」は石の義なりと云へば「隋書」に石國と云へるは國名の意譯なり。土耳其語の「Tash-kand (石城) の變形たる今の「Tashkend」が唐代の石國に當ること正に相當れり。葉河は「隋書」に藥殺水とし、羅馬の地理家は Yaxartes とし、今のシル河 (Syr-daria) と號す。「隋書」石國傳に、「突厥射置可汗、興兵滅之、令特勤旬職攝其國事」といひ、突厥の可汗が石國を滅ぼして之を併せ、武將の旬職を以て新屬地の知事に任ずる事實を傳へ、正に「西域記」の「役屬突厥」を説明するに足れり。」と。この「大唐西域記」の記事と、「西使記」に記載されている「賽藍の地」とあるのを定位置にしてみると、唐初に筈赤建國に相當するように思われる。且つ、この國に王様が居て、その國名がそのまま城の名になっていない證據であると考えられる。

「ブレットシュナイダー氏の訳並びに注記」さらに西方に旅行すること四日にして吾々は荅刺速沒鞏に到達した、(注179、この河はタラス河である、というのには沒鞏は *nuren* 蒙古語で河を意味する語に由来している。唯、この西遊記の記述にはいくらかの混乱がある。旅行者たちが、アルマリクからタラス河(注23を参看のこと)迄の距離を四日間の行程とし、六〇〇英里としているのは全く不可能である。Lerch レルチ氏が荅刺速沒鞏をタラス河を指しているのではなくて、チュー河を意味しているのだと考察している。また Schuyler スクキラー氏(その著「トルキスタン」第一卷三九七頁)はその長春師の日記記載者がイリ河を指していて、それが唯、筆が滑って誤ってタラス河と呼んだのだらうとする見解をもっているとするのである。わたくしとしてはこの旅行者が旅行中に記しておいた注記を案配して、この地方の旅行記の或る部分を別に深く考え

ることなしに書き写したと考える方が、より簡単な回答だと思われるのだが。こうしたことはこの日記の筆者がタラス河を渡った後にカラキタイの国(さらに今後の本文を参照のこと)を注記している事実から明白である。一方において耶律楚材(注22を参照)が常德(次の章を参照)と同じ様に、彼らがタラス河(乃至その都城)を渡った後にカラキタイ(黒契丹)について言及しているのもわかる。さらに亦リユブルクが、西方から東方に向けて中央アジアを通過した際に二人の中国人旅行者と一緒にしたことを最後に言及して、最初にタラス城について注記し、その後、以前にカラキタイ人が居住していた国に到達した由を述べている。カラキタイの可汗がチュー河の畔で住居を定めていた(タラス河の東に位置した由)が知られているが、このチュー河についての記述は、常德の家郷へ帰還する旅の途次なされたものである。常德の「西使記」に記載されたその距離はタラス河とアルマリク間、眞実に沿うていゝるのではなからうか。こうしてみると、何故、長春師の日記筆者がタラス河からSairanまでの旅程が略一六英哩で、一ヶ月たつぷりかかったと信じているのか、理解するのに容易であろう。一方においてアルマリクからタラス河の距離が六〇〇哩でほんの四日間を横断したと考えるのもいゝるのである。()

深くて幅の広い河は東方から流れ下り、陰山山脈を横切りながら北西方向に流れている。再び河の南方に当たって雪を嶺いた山がある。十月一日(十月十七日に相当するのだが)、吾々は河を一艘の小船で渡り、さらに南方に進路をとり、大きな山の麓に到着した。その北側斜面に小さな町があったのである。(注180この小さな町によって、咄邏私タラス Talas なし、Tanas の都市がわかる筈であるかどうか、言及する程予備知識があるわけでもない。亦さらに注記185で言及するであろう。)そこから吾々は西に向つて五日間旅したのだ。長春師が皇帝陛下の命令によって旅行しているの、吾々が今や成吉思汗の幕营地へ近づくに従つて、長春師の到達したことを成吉思汗に報告するに先立って仲陸が報告に行き、一方鎮海公は師と行を供にすべ

く留まっていた。

再び西方に向って七日間旅した後、吾々は一つの山岳を越えたのだが、中国に戻る使節に出逢った。(注181長春師は此処で金の使者烏古孫と対面したのだった。注45を参照のこと。) — (郎案・ブレッドシュナイダー氏『中世研究誌』所収、劉祁の「北使記」の訳注に曰く、「烏古孫が金、宣宗興定五年(A.D.一二二二年)十月(十月ないし十一月)に戻った。(注45この記事の烏古孫帰還の年代は誤っている様に思われる。長春師の「西遊記」の記述のなかで、彼ら一行は興定五年その帰り道に金の使者に出逢ったと云っている。その場所はタラス河の西岸に当っていて、興定五年の十月十三日と云うが烏古孫の伝記に、同年十二月(興定六年正月)中国への帰途の時に当るとしている)。— この金朝の使者烏古孫は長春の幕営の前に跪いて儀礼を表したので、「何時貴方はお立ちになられたのですか」との長春師の問いに対して、使者は「七月十二日(実は八月一日に当るのだが) わたくしは最後の別れで陛下にお目通りいたしましたのです。陛下は算端汗を追うて印度に行かれる所だったのであります。」と答えたのであった。(注、182…スルタン・カーン・ホワレズムのスルタンデュラル・エッディーン Djelake ddin のこと、カルピニの云うアルティ・ソルダヌスを意味する)

翌日ひどい降雪があり、吾々は回紇(マホメット教信者たちの居る)の小城に到着した。その降雪は一尺ほどの深さに積りはしたが、陽光ですぐに融けてしまった。

A.D.一二二二年(元、太祖十六年)十月十六日(実は十一月に吾々の暦では当る)吾々は南西方向に進行して板橋の架け渡した河を越えて、その夕方に南山山脈の麓に到着した。此の地は(以前に)大石林牙の領地だった所で、彼は西遼の後裔であった人である。(注183、注179にも示しておいた通り、カラキタイについての記載は、この「西遊記」のなかで正当な場で論じられてはいない。こうしたカラキタイ国、即ち西遼に関して

云えば、注の22を比較参照されたい。「郎案、ブレットシユナイダー氏耶律楚材の「西遊録」の注記22を抄訳すべし、即ち「西遼はペルシアの年代記作者の云うカラ・キタイである。カラ・キタイの帝王は契丹、ないし遼朝の王子によって開基されたが、その皇子は北中国から家臣らと逃亡してA.D.一二二五年(宋、徽宗、宣和七年、遼の徳宗耶律大石、延慶二年)に金朝により遼が倒された時に当っている。中国人により耶律大石とよばれた遼の主権者が、東西両トルキタンをさらにはKhovarezmをも征服したのだった。ペルシアの史家ラシッド・エッディンは、カラ・キタイの首都はBelasagum(恐らくは蒙古語で「都市」を意味する balgasumと全く同じ言葉であると思われるが)であると述べている。中国人の著作家は、Hus-z-wo-lu-doとそれを呼んでいる。この最後の三文字、wo-lu-doは亦war-doとも書かれているがこれはordoを示し指しているようで、すなわち可汗の居城を意味する言葉に由来している。満洲語のHosunは「権力」を意味している。恐らくはHus-sも恐らくは契丹人の言葉のなかで似た様な意味を持っていたと思われる。この契丹人はよく知られているように、満洲族と同じ種族ツングースに属していたらしい。元朝秘史によると、カラ・キタイの首都は吾々の地図の上にもみるチュー河Chui吹河の畔にあったと云っている。カラ・キタイについて、さらに詳細は第二部を参照されたい。カラ・キタイ帝国はナイマン族の最後の汗の子息、Guchukによって、A.D.一二〇八年(南宋、嘉定元年)に滅ぼされた。このグチュルクはA.D.一二二八年(元、太祖十三年)に蒙古人たちにより殺害された。このようにして、カラ・キタイの帝国は耶律楚材がこの地方を通過した時には存在していなかったのである。」と。―再び注183に戻る―長春師が板橋を渡ったその河は恐らくはチュー河と思われる。リュブルクも亦カラ・キタイ国のなかで大河を渡らなければならなかった。亦注540を参照のこと。

さて、金の軍隊が遼を屈服させたので大石林牙は何千人という部下と供に北西方向に逃走した。十余年あち

らこちら彷徨した後に、遂にこの地に到達したのだった。

此の地の気温は陰山（天山山脈）の北側地域の気候と全く異っている。土地は多くの平野部が開け、住民たちは農耕作業を楽しみ養蚕に勵んでいる。彼らは葡萄から酒を醸造し、此の地の果実は中国に産するものと殆ど全く同じである。夏と秋の間ずっとこの地に雨は降らない。そのために野原は諸河から導いた溝渠から人工的に灌漑をする。そこで穀物は種々多くが造られている。北西方向には山脈が聳え、一方南西に平地が開け、略一万里にも及んでいる。（注184この国についての上記の記事は、カラ・キタイについての歴史上の注記に誤って注解されているようだ。この国はさらに西方、シルーダリア近くに合致すると考えた方がより好いように思われる。）

カラ・キタイの王国は略百年間存在した。乃蠻^{ナイマン}の勢力によって破れたので（注98を参照のこと）、彼らは大石林牙まで逃れた。（この種族の長Tayank Khanの息子Guchluk）乃蠻がそして力強くなってから、このカラ・キタイ国を圧倒したのだった。それに伴って、算端（Khovarezmのスルタン）がこの乃蠻の支配地の西方部分を占領した。その折成吉思汗がそこに到着したので、この乃蠻（Guchluk）は徹底的に打ち破られ、しかも算端も亦滅亡してしまつた。

吾々は吾々の前に横臥る道には多くの艱難辛苦があると知らされた。吾々の車輛の一台が破損してしまつたので、吾々はその車を後に置いてゆかねばならなかつた程である。

十月十八日（実は吾々の暦では十一月三日に当る）吾々は山脈に沿うて西の方に旅行した。七、八日行程の旅行の後、この山脈は突然南に向きを変えた。吾々はそこで赤い石で造られた都市を見たのだが、尚また古代の軍事施設の痕跡も残存していた。その西側で吾々は大きな墳丘を見たのだが、その形状は斗星（Ursa Majorの星座）（郎案、「諸橋漢和」に曰く、「斗星、星の名（易、豊、日中見斗疏）處日中盛明之時、

而斗星顯見「星經」斗五星在南星西南、主稱量度、「晉書、天文志」斗星盛明」とあり、されど、これによってその墳丘の形状を具体的に想起すること難し。石橋を渡った後、〔注185、スクキラー氏 Schuyler は長春師が此処でタラス河を渡ったのだらうと信じ、この「西遊記」に謂う赤い石で造られた橋はタラス城市に属するものだという。さらにスクキラー氏は、中国の旅行家によって、言及されているこの城市は依然として、そこに存在していた筈と述べている。併し、Lerch レルチ氏が、これらの一つの墳丘のなかで滿洲語の銘文をもった石を発見したのだが、A.D. 一七五八年(明世宗、嘉靖三十七年)に中国人が Dsungars (ズンガリア人) を征伐した折の戦勝に関聯しているものなのである。この同一事象は別に価値もないのであるが (Schuyler's "Turkistan", ii, p.122) わたくしは、このスクキラー氏が、長春師の旅行記「西遊記」のなかに出てくる咂羅斯河はタラス河ではなくて、むしろイリ河であるとする推測が正しいかどうかを決定すべき材料を用意してないのである。そしてその河が墳丘に近い処を流れている場合故にタラス河だとしている。こうしてみると与えられた地理学的記載が継続的にみられる旅行記のなかに或る混乱がみられるのである。併し乍ら、アルマリク(現在の Kuldja 近くにあたる)を出発した後に中国人旅行者はイリ河を渡ったこと疑いが無い。というのも、この河が Kuldja から程遠くないように思われ(注25を参照)さてこそ現代の Jenny が建っている地点に歩を進めたのだらうと思われる。西方にアルタイ山脈に沿って行くと、長春師は古代の駅通路上にある Kastek 峠を越えることになる。 (Jenny からタシュケント迄の現在の駅通路は、車輛のために整備されていて、此処で北方に向っての遠廻り道をとることになり、さらに再び Pishpek で古代の道と合致する。) 長春師は現在の Tokmak に非常に近いチュウ河を渡ったことは非常にあり有ること、アレキサンドロフスキー山麓に到達するのである。その山麓に沿って西方に向って旅すると、その山麓には現在駅通路が存在しているのだが、やがてタラス河までやって来て、現在の Aulie-ata の近くでその河

を渡ったことになっている。」そして南西に伸びる山並に沿うて五日行程の旅をすると塞藍城に到達する〔注186、これこそ Sairam サイラム城であり、Chimkent の東約十三英里に依然として存在している。Auliata からタシュケント迄の駅通路は Sairam の近くを通過している。Lerch (Archaeological Journey to Turkistan, p.35 「タシュケントへの考古学的旅行」)レルチ氏は、このサイラムこそ Ibn Haukal や他のアラブ系の地理学者たちの謂う古代の Isfidiab に違いないと云っている。〔郎案、馮承鈞著「西域地名」に曰く、即ち「Isfidiab」、アラビア語の意味は白水である。新舊唐書に白水城に作り、新唐書は一つに白水胡城に作っている。慈恩傳には白水城とあり怛邏斯 (Talas) の西南二百里の賽里木村 (Sairam) がそれにあたると云う。亦た、そこで、「元史・西北地附録」に云う賽蘭城とあるのがそれである。Sairam の條を参照のこと。〕とある〕。ラシッド・エッディン Rashid-eddin はこのサイラムをタラスと一緒にトルコ族たちの居住する場のなかに数えている (『Berezin, 一卷、一二頁参照) この賽藍城には小さな塔があり、回紇人の回教徒である支配者は吾々に遇いにやっ来て、吾々の幕營地について指図してくれた。(未完)

Summary

Ch'ang-Ch'un's 長春真人 Hsiyuchi 西遊記

Translation into Japanese and Annotation by Jiro SUGIYAMA
(Sequel)

SUGIYAMA Jiro

The Hsiyuchi is an important and interesting record of the journey made in the 13th century by Ch'ang-Ch'un, a Taoist master famous for his wisdom and sanctity. Ch'ang-Ch'un was obliged to follow and advise the Mongol Emperor Chinghis khan during his military expedition in Western Asia. The journey lasted three years (1221-1224).

The Hsiyuchi was not written by Ch'ang-Ch'un himself, but by Li chi-ch'ang 李志常, one of his disciples, who accompanied him and kept a diary of the journey. I used for my translation late Professor Wang kuo-wei's 王國維 excellent annotated edition. In 2002, I published the first part of my annotated translation as a separate volume in our college's series.

The contribution in this issue of the Journal represents the sequel of the translation.

*Professor,
International College
for Advanced Buddhist Studies*